

---

# クサナギ

ZARUSOBA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クサナギ

### 【Zコード】

Z0215D

### 【作者名】

ZARUSOBA

### 【あらすじ】

ここは見知らぬ辺境の星「クリシュナ」ここでは人々が自由気ままに過ごしていた。仕事に精を出す者、日々寝て過ごす者。あらゆる意味で自由な星であった。しかし、その自由気ままなルールが災いし、この星では様々な問題が増えていった。貧富の差の拡大。犯罪の増加。歯止めがきかない負の連鎖。そんな中、一人の男と一人の少女の姿があつた。あまりに不釣合いな二人。彼等の行くところ、スリルあり、ドラマあり、安息なし。そんな彼等の物語。

## プロローグ

暗い闇に映える丸い月。

あたりは眠つてゐるよう静か。

そんな夜の街で悲劇は起こつた。

「うあ……うわああああ！」

突然の悲痛な叫び声。

少年はその場でのた打ち回る。

それもその筈、彼の右目からはおびただしい血が流れていた。

必死にそれを押さえる少年。

激しい痛みが彼を襲う。

だが、それ以上に目の前で起こつた惨劇の怒りの方が大きかつた。少年の前には物言わぬ亡骸が二つ。

一つは見る影も無いほどにズタズタに全身を切り刻まれていた。手足、胴体、頭。全てが原型を留めていない。

もう一つは、「誰か」が持ち上げ、死んでいるのにも関わらず、未だ長い刀を抜いたり刺したりを繰り返していた。

この「誰か」こそがこの惨劇を起こした張本人だ。

そして、気が済んだのか、それとも飽きたのか、持ち上げていた死体を放り投げた。

そして、少年の方へと足を運ぶ。

手には2mはあるのではないかと言う刀。

惨劇を起こした刀を引きずりながら少年の目の前に立ちふさがつた。

「よう、少年。お前、俺が憎い？」

返り血で真っ赤に染まった口がケタケタと笑う。

本来なら、その顔を見るだけで人は恐怖で何も言えなくなる。  
だが、少年は恐怖以上に、怒りがまさつていた。

「憎いに決まっているだろ！ 殺す！ 貴様は絶対に殺してやる！  
俺の父さんと母さんをよくも——！」

殺人鬼に殴りかかる少年。

だが、実力差は圧倒的であつた。

少年の拳をかわすと同時に腹部に膝を入れる殺人鬼。

少年の怒りも虚しく、腹部を押さえてそのまま崩れ落ちる。

そして、殺人鬼は少年の髪を乱暴に掴み、顔を正面から向かい合つ。

「いいね、少年。気に入ったよ。その無謀さに免じて、  
君は見逃してやろう」

殺人鬼の気まぐれ。

少年が抵抗したのがよほど嬉しかつたのか、顔の表情が緩む。  
髪を掴んでいた手を離し、そのままゆっくりと少年の下を去る。  
そして、最後に殺人鬼は捨て台詞を残していく。

「俺を殺したいのなら頑張れよ？ 今日から復讐の始まりだな。  
楽しみにしてるぜ？ 少年」

そいつって顔だけ少年の方に振り返る。

少年は意識を失う前に殺人鬼の赤い瞳だけが印象に残つていた。



## 第一章 ヴクサンナギとコイ

ここは見知らぬ辺境の星「クリシユナ」  
ここでは人々が自由気ままに過ごしていた。

仕事に精を出す者、日々寝て過ごす者。  
色々な意味で自由な星であった。

しかし、その自由気ままなルールが災いし、この星では  
犯罪が年々増えていった。

この町「ウエスタンス」もその影響を受けていた。  
昔は鉱石の発掘で栄えたこの町も、今では見る影も無い。

人を迎えるはずの町の入り口はカタカタと看板が揺れていた。  
町の中は砂埃をあげる風が虚しく吹いていた。

西部劇を思わせる木造の家が立ち並ぶ。

唯一、町の酒場からは昼間だと言つのに、人の声が絶え間なく  
聞こえていた。

酒場の中は薄暗く、天井には換気の為と思われる羽がゆっくりと  
回り続けていた。

そして、いくつもの丸テーブルに拳銃を携帯しているウエスタン風の  
ゴロツキが何人もたむろつていた。

この酒場ではこれが日常茶飯事。  
しかし、今日だけは違っていた。

「いらっしゃ……」

酒場の扉が振り子のように開く。  
扉の開く音で、酒場のマスターは挨拶をした。  
何時ものゴロツキかと思って客の顔を見ると、

そこには黒い服の男と二十代前半の少女が立っていた。

黒い服の男は、見かけからして、歳は二十代前半。

ボサボサの黒い髪に黒いサングラス。

身長は一八〇cmほどで、体格はやや筋肉質。

黒い長袖のシャツに上に黒のジャケットを羽織っていた。

下は灰色の長ズボン。

そして、その隣の少女は、髪は白く真珠のように輝いており、  
目は深い蒼い色。

顔立ちは理想的な卵型。表情は氷のように涼しげで、  
身長は黒服の男の胴辺りといったところだ。

彼女は、自分よりもひと回り大きいトランクを後ろに引いていた。  
片手とトランクをがんじがらめの鎖で繋いでいる。

分厚く、銀色のステンレス製のまるで金庫のようなトランクだった。  
それを苦も無く持ち歩く少女。

「ちわーす。申し訳ないんですが、飲み物とか頂けると非常に  
助かるんですけど……」

容姿とは裏腹に陽気な声で喋る黒い服の男。

黒服はキヨロキヨロと辺りを見回し、空いている席が  
カウンターしかないと分かると、あっさりカウンターに  
座つた。

「すいません、酒とミルク。ジョッキで」

注文と同時にお金を出す黒服。

それを見た50代半ばの白髪交じりのマスターは渋々注文を受ける。

マスターは後ろの酒棚から酒を取り出し、冷蔵庫からミルクを取りだす。

「はいよ」

二人の前に出されるミルクと酒。

そして、それを二人は一気に飲み干した。

「ちょっと！？　ちょっとお密さん！　何してるんですか！」

「ん？　金は払つただろ？」

おかしいな？　と首をかしげる黒服。

だが、酒場のマスターが驚いているのはそこではない。なぜなら、黒服の男がジョッキでミルクを飲んでおり、そして、あろう事か少女がジョッキで酒を飲んでいたのだ。

「困りますよ、こんな子供に酒を」

「まあ、硬い事言わない。お金は払つてるんだから、ね？　後何か食べ物ない？　あつたら欲しいんだけど」

黒服のいい加減さに呆れつつも、渋々言つ事を聞くマスター。マスターはサンドイッチを黒服の前に出す。

「お密さん、随分と大きな荷物をお持ちですね？」

マスターがチラリと少女のトランクに目をやる。確かに、旅行用にしてはサイズが大きすぎまる。

気になるのも無理は無い。だが、マスターがそんな質問をしたのはもう一つ別の理由がある。

周りにいるゴロッキが田でマスターに合図を送っていた。  
もし、中身が武器などであればそれ相応の『対応』を取らなければいけない。

「あれ？ マスター気になるの？」

「え、ええ……」

そんな事とは露知らず、黒服は聞かれてニヤニヤと笑う。

「見たいんだつたら、見せましょうか？」

「えつ？ いいんですか？ お密さん」

「まあ、見せて減るようなものじやないですから。おい『ゴイ』良かつたら見せてやってくれないか？」

ゴイと呼ばれた少女は、黒服の声に無言で頷く。  
そして、おもむろにトランクの鍵を開ける。  
蓋と呼ぶには大きすぎる。まるで扉のようだ。

そして、トランクの扉が開かれた。

中からは、何かの機械のパーシラしきものがぎっしりと整理整頓され、

保管されていた。

その数は数え切れないほどだった。

「これは、なんですか？」

「まあ、見ての通り機械のスクラップだよ。こいつが結構な金になるんだ。

少しでも量を増やしたいから

「じつは大きなトランクを運んでるって訳」

フフンと、微かに笑う黒服の男。

それを見たゴロツキとマスターはほつと胸を撫で下ろす。

そして、何事も無かつたかのよつにゴロツキ達は再び仲間内で

雑談をし始めた。

「お密さん、言つちや何ですが早くここから出て行ったほつがいいですよ?」

布でグラスを磨きながら、周りに聞こえないよつな声で  
ポツリと話すマスター。

その言葉を聞いた黒服の男と、少女はキョトンとしていた。

「えつ? 何で?」

「ここいらは、「賊」に支配されているんですよ  
「賊?」

「ええ……数年前に突然、『チキン=タッカー』と呼ばれる  
悪党がこの町を根城にしちまいまして、ほら、後ろのゴロツキ共が  
タッカーの部下ですよ。それからというものの、タッカーの野郎は  
私たちに膨大な金を要求してくるんですよ」

酒場のマスターが暗い影を落とす。

「あらり、そりや災難ですな。だつたら抵抗なり、逃げ出すなり  
すればいいじゃですか?」

黒服はサンドイッチをほおばりながらマスターに問いかける。

所詮は人事と思つてか、その声からは同情の余地などひとかけらも

見当たらない。

「できるならやりますよ。チキンの奴は用意周到の奴でして、  
ここの周辺の国境は全てあいつの息が掛かってましてね、逃げ出す  
のも

不可能。抵抗しようにも、凄腕の銃使いがいるんで歯が立たない  
つて

わけですよ」

八方ふさがりと言った様子のマスター。

話しているうちにマスターはどんどん暗くなつていった。  
その様子を見た黒服と少女は、結構な厄介事と見たのか。

「なるほど、それじゃあ俺達も早くここから出て行つたほうが  
いいですね。うん、有益な情報をありがとうございました。  
まあ、悲しいですが、これからも頑張つてくださいね」

などと、慰めにもならない言葉を残して立ち去る。しかし、  
些か残つたサンドイッチが黒服は気になつても、  
厄介事に巻き込まれるよつはと、出よつとしたその時。

外から車の音が聞こえてきた。

車は酒場の前で止まり、罵りあう声が聞こえる。

そして、扉から身体を縄で縛られた女性が勢い良く入ってくる。

女性は見た目は20代前半。

ショートヘアで茶髪。赤い縁の眼鏡をかけていた。

眼鏡の奥では透き通るような黒い瞳。

白いシャツに灰色のベストを着こなし、青のジーンズを着ていた。

スタイル、容姿共に中々のものであった。

突然の来訪者に「ゴロツキどもが騒ぎだす。

女性の後ろから、いかにも悪そうなゴロツキが2、3人入つて来た。

「ジョンの兄貴！ どうしたんですか、この女は？」

酒場の中の一人のゴロツキが女性の後ろから入つて來たリーダー格の男に話しかける。

ジョンと呼ばれた男は倒れていた女性を持ち上げる。

「この女がな、隣町の警備隊に俺達の事を話そっとしてたんだ。

間一髪、こうして犯人を取り押さえたってわけだ」

ジョンの言葉に酒場のゴロツキから拍手や口笛が飛ぶ。

まるで、英雄を称えるかのような雰囲気。

だが、女性は男をキッと睨みつける。

「ふざけないで！ 貴方達がやっている事は許されん」とじゃないわ！」

「何が犯人よ！ うぬぼれるのもいい加減にしなさい！」

女性の怒鳴り声に、ジョンは腹が立つたのか、思いつきり女性の頬を平手打ちする。

酒場に鋭い音が響き渡る。

女性の頬はみるみる赤く染まつていく。

だが、彼女の目はそんな暴力に屈する事無く、ゴロッキを見みつけていた。

そんな態度に出る彼女に、ジョンは苛立つ。

「おもしれえ、だつたら遊んでやるよ」

ジョンは彼女を酒場の中央に放り投げる。

周りのテーブルに居たゴロッキどもが彼女を中心に円を囲む。その数、8人ほど。

そして、ジョンと一緒に入つて来たゴロッキが一人。

計11人が彼女を取り囲んでいた。

全員がいやらしい笑みを浮かべる。

「よかつたなあ、姉ちゃん。死ぬ前に俺達が遊んでやるんだから」

ゴロッキどもの態度にさすがの女性も恐怖したのか、肩がガタガタと震えているのが見て取れる。

そして、彼女に、ゴロッキ共が女性に一斉に手を伸ばそうとした瞬間。

「あー、お取り込みの最中にちょっとといいでですか？」

突然の声にピタリと「ゴロツキ達の手が止まる。  
その声の主は黒服の男だった。

「何だ、てめえは？」

一人の「ゴロツキ」が銃を抜いて黒服に向ける。

それを見た黒服は降参、無抵抗と両手を万歳して  
意思表示をする。

「えつ？ 私ですか？ 私の名前は『クサナギ』です」「  
クサナギと呼ぶ黒服は「ゴロツキ」達と僅かに距離を置いて  
万歳の姿勢で話しかける。

「もし、良かつたらその人助けてあげれませんかね？」  
「はあ？ てめえは馬鹿か？ 助けれるわけねえだろ！？」  
そこで俺達がしてる所でも見てな」

下品な笑い声が酒場に響く。

はあ、と呆れた声でクサナギはため息をついた。

「いや、俺は別にその女性がどうなってもいいんです  
が、ゴイの奴がお願いしてくるものですから、どうか何卒  
よろしくお願ひします」

そういうと、頭を深々と下げるクサナギ。  
その言葉にペツと地面につばを吐く「ゴロツキ」。

「嫌だね。この女もこうなる運命だったって訳だ。

分かつたか？　てめえも無駄なんだよ。力の無い奴が  
出しゃばるな

再び下品な笑い声が酒場に響く。

だがこの時、彼等は気づくべきだった。  
彼の逆鱗に触れていたという事に。

「……なるほど、確かにあつしやる通りだ。力の無い奴には  
何も出来ない。人を助ける事も、自分を守る事も」  
「あん？」

「お楽しみの最中を妨げて申し訳ありません。お詫びと言つては  
何ですが、貴方達に一番高い酒をご馳走させてもうれしいでしょ  
うか？」

突然、裏を返したような態度を取るクサナギ。  
だが、酒と言つ言葉に『ロシキどもは騒ぎ立つ。

「コイ、彼らに『一番』をプレゼントしたいんだが？　いいか？」

クサナギはコイの方を振り返る事無く背中越しに喋る。  
ユイはクサナギの言葉に、微かに笑みを浮かべる。

「『一番』……でいいのよね？　クサナギ？」

初めて喋るコイ。

その声は涼しげで凜としていた。

「勿論だ。早くしてくれよ？　彼等を待たせては失礼だ」

「なんだよ、てめえ、結構いい所あるんじやないか」

「ゴロツキどもは浮かれていた。

しかし、それも一瞬のものだとは彼らには知る由も無い。

「ん？ あれは…… 警備兵じゃないですか？」  
「！？ 何！？」

窓の方を覗きながら喋るクサナギ。

警備兵と言う言葉に「ゴロツキどもが一斉に窓の方を見る。  
無理も無い、先ほどのジョーンの言葉が耳に入つていれば警戒  
するには当然だ。

だが、それはクサナギによる嘘<sup>ラフ</sup>

しかし、この状況で嘘など喋れる人間がいるだろうか?  
目の前には10人を超える人数が拳銃を所持している。  
その状況も有り、自然と全員が窓の外を見ていた。

時間にして僅か2秒足らず。

だが、彼にとつては充分すぎる時間であつた。

ゴロツキが窓の外を向くのと同時に静寂を破る音が二回。  
その音でゴロツキどもはハツと我に返る。

だが、時既に遅し。

中央に居たはずの女は居なくなり、近くには「めかみに  
大きな風穴が開いたゴロツキが一体。

クサナギのほうを見ると、彼の片腕には先ほどの女性が  
抱きかかえられ、そして、もう片方には何時の間にか  
大型の真っ赤な拳銃が握られていた。

45口径で大型の自動拳銃

オートマチック

普通の物に比べて大きさが一回り大きい。

明らかに量産品ではないオリジナル。

血に染まつたような紅いボディに、まるで銃 자체が鎧を着ているかのような装飾と重厚感。音の正体と思われる銃口からは煙が出ていた。

「えつ？」

驚きの声は女性からだつた。

彼女自身、何時クサナギによつて助けられたか分からなかつた。気づいた時には既にクサナギの腕に抱かれていた。あまりに一瞬の出来事。

「て、てめえ！ よくも！」

ゴロツキの怒りの矛先がクサナギに向く。

残りのゴロツキが一斉に腰のホルスターの銃に手を掛けよつとする。しかし、既にクサナギは次の行動に移つていた。

銃を水平にし体を独楽の様に回転させ、流れるような動きで正確にゴロツキの額に弾丸をぶち込む。

その数なんと三人。

そして、その回転の勢いで女性をカウンターの方に投げ飛ばす。

「きやああああ！」

悲鳴をあげながら、カウンターの酒棚にぶつかる。

派手に酒瓶が割れる音と共に女性はカウンターの奥に倒れる。クサナギとユイもカウンターの奥へと隠れる。

彼らが隠れたと同時に銃声が飛び交う。

絶え間ない銃弾がクサナギ達に襲い掛かる。

何とかカウンターの影に隠れてやり過ごしていくものの  
状況は非常に劣勢。

向こうは手練れがまだ6人もいるのに比べて、こちらは  
戦えるのがクサナギ一人。

そんな絶望的な状況にした張本人は。

「いやー、楽しくなってきたね」

全く気にしてなかつた。

それどころか、この状況を楽しんでいる様子。

「な、なんでこんな状況で笑つていられるのよー。」

そんなクサナギを見て驚く女性。

「……クサナギは、壊れてるから」

ユイが呆れた表情で喋る。

そもそもその筈、クサナギを見ればこの状況にも関わらず、  
カウンターの上にあつた残り物のサンドイッチを頬張っていた。  
ユイの言つていた事もまんざら嘘ではないようだ。

一向に止む気配が無い敵の銃声。

もし、このまま長丁場になれば「ロロツキの仲間が  
異変を感じて駆けつけるだろ」。

時間が経てば経つほどクサナギ達にとつては不利。  
クサナギは何を思ったのか、ユイに拳銃を手渡す。

「ユイ、『三番』だ」

「三番？ 敵が多いのに『三番』？ 『一番』の方がいいんじゃないの

？」

「一番は駄目だ。物陰に隠れてる奴らに一番じゃあ役不足だ。  
二番にしておいてくれ」

傍から聞けば何の事だかさっぱり分からぬ会話。  
コイはクサナギの言葉に頷くと、金庫のようなトランクの  
蓋を開ける。

「……あ」

「ん？ どうしたコイ？ 何かあつたのか？」  
「タイム……計つてくれないと」  
「お前、こんな時でもこだわるのか？」  
「クサナギの精神に比べればまだまし」

クサナギはコイの言葉に苦笑いをしながら、ズボンの  
ポケットの中からストップウォッチを取り出す。

「あなた達、何してるの？」

クサナギ達の奇妙な行動に興味を持つたのか、女性が  
クサナギに話しかける。

それを見たクサナギは何を思いついたのか、女性の縄をほどぐ。

「あんた、名前は？」  
「えつ？ わ、私は『アイリーン』よ」  
「じゃあ、これはアイちゃんに任せせるわ」  
「えつ？」

そういうてクサナギはアイリーンにストップウォッチを渡す。  
何がなんだか分からないといった様子のアイリーン。

「じゃあ、コイ。準備はいいか？」

クサナギの言葉にコクリと頷くコイ。

「それじゃあ、スタートー！」

瞬間、目を疑う光景が広がる。

それを見ていたアイリーンは言葉を失った。

コイの手が動いたと思ったら、持っていた拳銃があつといつ間に  
パーツに解体されていく。

リズム良く、そして華麗に。

その指の動きはさながらピアノの演奏のようだ。

そして、トランクの中になつたパーツを素早く取り出す。  
解体した拳銃のパーツとトランクの中のパーツが  
ジグソーパズルのように組み合わせていく。

「……おわった」

コイの言葉が出た時には手の中になつた拳銃は姿を変えていた。  
先程の2倍ほどの銃身に、大口径。

パーソナルカラーと思われる紅い色だけはそのまま。

スライドの役割はポンプアクションに変更され、その一撃は  
至近距離ならば大口径ライフルに匹敵するといわれる銃。

「散弾銃」<sup>ショットガン</sup>へと変わっていた。

変更するにかかった時間はおよそ2秒。

人間離れした芸当を年端もいかぬ少女が見せつけた。

その光景を目の当たりにして口が開いたままのアイリーン。

「こべりっ？」

「えつ？」

「何秒かかった？」

「あつ！ えつと……その、 5秒……」

その言葉にユイは頬を膨らませる。

無理も無い。彼女は今まで『3秒より後れた事が無いからだ』明らかにアイリーンがストップウォッチを止めるのが遅かつた。

「良かつたな、『最低』記録更新おめでとう」

ヒーヒーと腹を抱えて笑うクサンギ。

むすっとした表情でユイはクサンギに散弾銃を投げ渡す。クサンギは受け取ると素早く銃をチェックする。

「ユイ、『スラッグ』をくれ」

「スラッグ？ 散弾じゃないよ？」

「いいんだよ。相手さんは物陰に隠れているからそれ」と「撃ち抜く

幸い、距離の方は心配しなくて良さそうだ

散弾銃には一種類の弾がある。

「散弾」と「単発弾」の一一種類だ。

「散弾」はシェルと呼ばれるケースの中に小さな弾丸が封入されており、

発射する事で中の小さな弾丸が放射状に広がる弾の事。

「単発弾」は文字通り一発の弾体を発射する弾の事。これを『スラッグ弾』と呼ぶ。

この単発弾は散弾と比べて遙かに威力が高く、障害物を破壊する目的でも

使われる。だが、その反面、距離があると威力が落ちる。

クサナギは手馴れた手つきで弾を込めていく。  
準備は整った。

だが、撃つタイミングが見当たらない。

一瞬でも顔を出せばたちまち蜂の巣になる状況。

クサナギはキヨロキヨロと辺りを見回すと、冷蔵庫の中から手のひらサイズの深緑色の野菜を取り出した。  
そして、それをゴロツキ達に向けて投げた。

勢い良く音を立てて地面に落ちる野菜。  
紛れもなく野菜だ。

しかし、遠くから見ていたゴロツキ達はそれは「爆弾」に見えた。

こんな状況でまさか野菜を投げつけてくるなどという  
発想はまず無い。

形と大きさも手榴弾に近かつたことも重なり、ゴロツキ達は慌てて物陰に身を潜める。

その瞬間、クサナギはカウンターから身を出す。

瞬時に「ゴロツキたちの位置を確認。

散弾銃を構え発砲する。

テーブルの影に隠れていたゴロツキをテーブルごとぶち抜く。  
豪快な音が酒場に響き渡り、同時に人が跳ねる。  
これで一人。

だが、散弾銃は連発するのには不向き。

一回撃つと、リロードを行わないといけない。

騙されたと分かったゴロツキはすぐさま反撃の態勢に出る。しかし、信じられない光景を彼らは田の当たりにする。

クサナギは撃つのと同時にグリップから手を離し、

反動を利用して、トリガーに引っ掛けたある指で銃を一回転させる。これにより、瞬時にリロードを済ませたのだ。

そして、すぐさま発射。

これだけでも曲芸の域。

だが、クサナギはコレを高速で『三回連続』やつてのけたのだ。

そのいずれもがゴロツキ達を正確に捉えていた。

もはや人間が行える業ではない。

撃たれたゴロツキが吹き飛ぶ。

残りは後二人。

リーダー格の男とその部下だ。

しかし、先程の人間離れした技を見せられて二人は戦意喪失状態だった。

明らかに目が泳いでおり、銃を持っている腕はガチガチと震えていた。

「さてと、どうしますか？ お一人さん」

散弾銃を片手にカウンターの上に座るクサナギ。

ふあ～、とあくびをするなど、あまりの余裕ぶり。

「く、くそっ！」

勝てぬと悟ったのか、窓を破って逃げ出すゴロツキ。それを撃とうと思えば撃てたのにも関わらず、

黙つて見送るクサナギ。

こづして戦いは終つた。

以前の酒場は見る影もなくなり、

酒場の中は血と硝煙の匂いで充満していた。

「わ、私の店が……」

ガクリと膝を落とす酒場のマスター。

一番の被害者はこのマスターかも知れない。

目の前の惨劇の後を呆然と見つめるアイリーン。

カウンターの上からひょいと飛び降りるクサナギ。  
そして、ユイに散弾銃を投げ渡す。

それをユイは一瞬でばらして、全てのパーツをトランクの中にしま  
う。

クサナギは呆然としているアイリーンに近づく。

「よかつたなあんた、生きてて」

「えつ？　あ、助けてくれて……ありがとう」

「なーに、お礼を言うならあのトランク持つてる子に言つてくれ。  
あの子がアンタを助けてほしつて言つたから助けたんだ」

ニカツと笑うクサナギ。

そして、何事も無かつたかの様に酒場の入り口から出て行く。  
最後にバイバイとアイリーンに向けて手を振った。

## 第一章『クサナギとコイ』 3

「あつ！ 待つて！」

アイリーンは慌ててクサナギ達の後を追う。入り口を出たところで、クサナギ達は立っていた。クサナギ達の周りには何処から沸いて出てきたのか、町の住民がクサナギ達を囲んでいた。

「あんた、何てことをしてくれたんだ！」

住民の一人が大声で怒鳴る。

そして、それに呼応するかのように周りの住民が口々に喋る。

「あんたのおかげで俺達はおしまいだよ！」

「そうよ！ あんたが何もしなければこんな事には……」

「おしまいだ！ あんたのせいであ殺しにされちまつー！」

クサナギに向けて次々と罵声を浴びせる。

それをただ黙つて頷いて聞き続けるクサナギ。

そして、ある程度聞き続けた後。

「はい！ もう結構です！」

クサナギは、そう言つて手を叩いて大きな音を出す。

そのあまりに大きな音は、住民を黙らせるには充分だった。

「貴方達の言い分を聞いたところで、俺が厄介事に首突っ込んだ為に、あんた達に被害が及ぶと？」

「やうだ！ デリしてくれるんだ！」

「じゃあ、あの時俺が女性を助けなければ万事解決してたと？」

「ああ！ その通りだ！」

その言葉にがっくりと頭を垂れる。

そして、肩を震わせながら。

「クツクツクツ……ハア～ハツハハハ！」

腹を抱えて笑いだすクサンギ。

その場で地面に倒れて転げまわる。

その光景に、誰もが唖然としていた。

「おい、聞いたかユイ。ここいらの言い分」

「聞いた。まあ、仕方ないんじゃない？」

呆れた表情を見せるユイ。

それはクサンギに対して、そして、この町の住民に対してもだ。

「いや、ここまで被害者面されると迷惑だな

「な！？ なんだと！？」

「ハツキリいってやるよ、あんた等、逃げているだけだよ」

クサンギはその場に座り込み、住民に言葉を投げつける。

逆切れとも思えるクサンギの言葉。

否、そう思つるのは住民だけである。

「あの時、俺が女性を助けなければあんた等全員が助かつたと言つたら、それは悪い事をした。だが、実際には違うだろ？ 助けなくとも、結局それはその場しのぎにしかならない。

本当の意味で助かつたとは言わない」「

「うつ……だ、だが」

「あんた等はそうやって楽な方に逃げてきただけだ。本当に助かりたいのならあの襲われた女性のように立ち向かうべきだ。あんたらに關しては反吐が出るぜ」

クサナギの言葉に返す言葉が無い住民。

なぜなら、全てクサナギの言つたとおりだからだ。

とはいって、言葉で言つるのは簡単だが、実際に行動を起こすのは大変なものである。

「ちょっと、あなた言いすぎよー。皆あなたみたいに力があれば解決しようとするわよー！」

「あれ？ アイちゃんは住民の味方なの？」 こいつら、あんた見捨ててたのに？」

「味方も何も、私が勝手に行動しただけ。この人達は関係ないわ」

「ふうん」

クサナギはスクッと立ち上がる。

そして、今度こそ立ち去ろうとした時だった。

「待つて！」

「ん？」

アイリーンがクサナギ達を呼び止める。

アイリーンは、意を決してクサナギ達に自分の思いを伝えた。

「もし良かつたら、貴方達でタッカーの奴を懲らしめてやれない？ 報酬も弾むから、お願ひ！」

「あ、アイリーンさん！？ な、何言つてるんですか！？」

住民がざわざわと騒ぎ出す。

アイリーンは真っ直ぐにクサンギ達を見つめていた。

「断る。自分たちの問題だろ？ 僕達には関係ない」

そう言つて、クサンギ達は町の出口へと歩いていく。  
それを後ろから追いかけるアイリーン。

「お願ひ！ タッカーは今日の事を知れば、私たちに仕返しに来る  
わ。

「そうなれば、さつきの酒場と同じような事になるわ！」

「知らん。俺は関係ない。それに、アンタだけだぜ？」

「俺に頼んでいるの」

「それはさつきあなたに暴言を吐いたからよ、頼みにくいに  
決まつてるじゃない」

「それほど切羽詰まってないって事だろ？ あんたも諦めな

話は常に平行線。

クサンギにはこれっぽっちも助ける気は無い。

そんな態度のクサンギに、アイリーンは黙子に出た。

「……分かったわ、私一人で何とかするわ

「へつ？ そりや無茶だろ？」

「無茶でもやるしかないの、このまま黙つて死ぬわけには  
行かないわ」

「ふうん、無駄と分かっていて、なお足搔くの？」

「そうよ。何もせず死ぬ事こそ本当に無駄だから少しでもあがくの  
よ

「……」

「一応、タッカーの豪邸はこの先の町の外れにあるわ」

アイリーンはある方向に指を指す。

クサナギが酒場で助けてくれたときのよつこ、  
今回も助けてくれるとアイリーンは願うしかなかった。  
無論、自分勝手で無茶苦茶だという事は  
アイリーン自身が一番感じている。

「それじゃあ、『またね』」

そういうつてアイリーンは踵をひるがえし、町の方へと帰っていく。  
それを黙つて見送るクサナギ達。  
そして、アイリーンの姿が完全に見えなくなつた。

「ねえ、クサナギ」

「……なんだ？ コイ」

「助けてあげるの？」

「まさか。俺はそんなに偽善じやがない」

そういうつてクサナギは肩をすくませ、軽く笑つ。  
しかし、いつも隣でクサナギを見てきた少女には分かつっていた。  
彼が、こうこう時どう行動するのか。

「重なるんでしょ？ 『あの時』と」

「……」

「助けてあげたらいいじゃない？ 町の人の為じやなくて、  
あの、無力だけど必死にこの町を変えようとしている  
あの人への為に」

コイの言葉に頭をガシガシと掻きむしるクサナギ。

その仕草は、照れているのか、イライラしているのか。  
答えは決まっている。

そして、そんな自分が嫌になるとクサナギは思っていた。

「なあ、ユイ」

「何？」

「ちょっと、寄り道していくか」

「はいはい。……もう、馬鹿なんだから」

木造建ての家が立ち並ぶこの町に、一軒だけ不相応な豪邸が町の外れに存在していた。

豪邸の周りには何人もの兵士が巡回しており、そのいずれもが機関銃を携帯していた。

豪邸の中では、ソファーにふんぞり返っている偉そうな男がいた。歳は三十代。

頭はモヒカンで、頬はこけており、それが元々鋭い目つきを更に鋭くさせていた。

服は紺のジャケットを素肌の上に着ており、筋肉を見せつけるような格好であった。

この男こそ、「チキン＝タツカー」その人である。

タツカーの目の前には、先程クサンガから命からがら逃げ延びた二人の部下が正座をして座っていた。

タツカーは、二人から事情を聞き、見るからに不機嫌になっていた。

「で、お前らは逃げてきたと？」  
「は、はい……」

近くのテーブルにあつた酒をグイグイと飲み始めるタツカー。  
そして。

「この……タコがああああ！」

飲み干した酒瓶を目の前の部下に投げつける。  
勢い良く田の前の部下の一人に命中する。

そして、タッカーは立ち上がり、部下の頭を掴み地面に勢い良く叩きつけた。

「十一人もいて、たった一人にやられる奴がいるか！　ええ！？」

何度も叩きつけるタッカー。

部下の顔面は額が割れて、血が吹き出していた。

止まらないタッカーの怒り。

これ以上続ければ死ぬ一歩手前ほどの時。

「そろそろ、いいんじゃないですか？　タッカーさん」

壁にもたれ掛かっていた中年の男性が話しかける。

カウボーイハットを被り、髪の毛には白と黒が入り混じっている。目は鷹のように鋭く、口には葉巻をくわえていた。

白い髪<sup>ひげ</sup>がもみ上げ辺りまであり、それが彼の渋さを更に際立たせる。ウェスタン風の服と、腰には彼の金色の愛銃「S&L20」が備えられていた。

S&amp;L20は、S&L社が二十周年を記念して作った

『S&A式<sup>シングル・アクション</sup>拳銃』

銃口は45口径、銃身は140mmで装弾数は六発。昔ながらのリボルバー拳銃である。

SAは、一度撃つと、再び撃鉄を倒す動作が必要となる。

故に、連射する事には向いていないが、精密射撃に特化している。

これに、S&L社が手を加えて銃の射撃時の反動、及び、精密さに更に磨きをかけて作り上げたものである。

人によつてはこの銃で無いと撃たないと言う人もいる。

その一人がこの男、タツカーお抱えの用心棒の  
「トニー＝ギャレット」である。

「と、トニー先生」

トニーに話しかけられた途端に、弱弱しくなるタツカー。  
それもその筈、今の地位はトニーのおかげなのだから。

トニーの銃の腕前は一流。

何度も危ない時もあつたが、このトニーのおかげで幾度と無く  
乗り越えてきたのだ。

「話を聞いていたが、こいつらだけの責任じゃなさそうだ。  
相手さん……なかなかの腕前だな」

「そ、そうか」

「どうするんだ？ 僕が町に出向くのか？」

トニーの鋭い眼差しがタツカーに突き刺さる。

それは、俺に任せろと言つ眼差しではない。

「こんな仕事で俺を働かせるのか？」 というものだ。  
それを察しているタツカー。

「い、いや、俺の部下だけで何とかする。アンタには『ジジヤ』と  
いう時に働いてもらつ

「……分かった」

そんなやり取りが豪邸の中で行われている最中。

豪邸の外ではぎこちない動きで物影から様子を伺う人がいた。  
アイリーンである。

手には拳銃を持っており、ガタガタと震える様子が  
見て取れる。

クサナギにあんなタンカを切つたものの、実際にタッカーの豪邸の前まで来てみればなんて事は無い、自分も町の住民と一緒に感じた。

中に入るには、豪邸の周りにたむろしている一十人ほどの部下を倒さなければならぬ。

奇跡でも起こらなければ到底不可能。

「何もしない」ではなく、「何もできない」だ。

結局、物影から出る事も出来ず、ただ黙つて様子を伺うだけ。

「何とか……しないと」

何時タッカー達が町を襲いに来るか分からぬ。意を決して物影から飛び出ようとした時。

「ムグツ！？」

後ろから誰かに口を押さえられる。

アイリーンは全く気づかなかつた。

我慢していた恐怖が、一気にアイリーンに襲い掛かる。

今にも泣き出しそうな表情。だが……。

「心配してきてみれば、やつぱりか」

「！？」

その聞き覚えのある声にアイリーンは驚きと嬉しさがこみ上がる。

後ろを振り向くと、そこにはクサナギ達が居た。クサナギは呆れた表情。

「きて……くれたの？」

「コイの奴が助けてあげたら~と、言つてくるものだから仕方なくな」

あ~あ、とため息をつくクサナギ。

そのクサナギの言葉に微かに笑うコイがいた。

「で? あの家の中にいるのか?」

クサナギが豪邸を指差す。  
それに頷くアイリーン。

「コイ、一番」

コイはトランクの中のパーツを即座に組み立て、手渡す。先程の酒場の中で見た自動拳銃だ。  
そして、銃弾をこめると。

「ほんじゃま、ちょっといらっしゃって来る」

「えつ? まさか、正面から行く気じゃないわよね?」

正面にはタッカーの部下が一人。

あんなところでドンパチやれば即座に周りにたむろしている部下が駆けつけてくるだろう。

幾らなんでも無謀すぎる。

誰もがどうやって部下の田を盗んで豪邸に忍び込もうかと考える場面においてクサナギは。

「ん? そのままかだよ」

「！？ まちなさい！ 無茶よ！」

「お前らはそこで俺のショリーでも見物してろ」「い、意味わかんないわよ！」

クサナギは、フラフラと酔っ払いのような足取りで正面のタッカーの部下一人に近づいていく。

「どうも～」

「あん？ 何だテメエは？」

ヤツホーと気軽に話しかけるクサナギに対しても、機関銃を向けるタッカーの部下。

「お暇ですかね？」

「何が言いたい？ さつさと失せろ。でなきや蜂の巣だぞ？」

「そういうわけには行かないんですよね～、これからパーティーが始まりますから」

「パーティー？」

何の事だ？ と部下一人は互いに顔を見合せた。

「あれ？ 聞いてないんですか？」

「知らねえよ。何時からだ？」

「今からですよ」

「あ？」

クサナギは口が三日月状に成る程の笑みを浮かべる。

そして、パーティーの開催を告げる銃声が一発響き渡る。

パーティーの参加者はおよそ二十人。

そんな数に全く動じないクサナギ。

いや、むじり彼ひとつでは『少年』並みだ。

「た、タツカーの頭！」

凄い形相で豪邸の中に入つてくるタツカーの部下。  
その様子は尋常ではなかつた。

「何だ！？ これから町の連中の所に行こうかとこいつ時にー。  
ば……化け物が外にいるんですよー。お、俺達じゅあ、歯が立ち  
ませんー！」

ガタガタと震える部下。

さすがのタツカーもその様子を見て、ただ事ではないと感じた。

「どんな化け物だ？」

「く、黒いサングラスをかけて、紅い銃を持つてゐる男です。し、信  
じられないんですが

「銃弾が当たらないんですよー！」

「黒いサングラスに紅い銃……ー？」

「……どうやら、報告にあつた連中のようだな

「と、トニー先生」

壁にもたれ掛かっていたトニーが口を開く。

そして、ゆっくりと壁から離れる。

彼は腰にあつた愛銃に弾丸をこめる。

「どうやら、俺の出番のようだな

「お、お願ひします先生」

タツカーラの言葉に無言で返答するトニー。

トニーにとつて、タツカーラはただの金づる。

一度として雇い主と思つたことなどない。

タツカーラの作り出したこの環境は、トニーにとつて退屈なものだつた。

一つの町を孤立させて、そこから金を少しづつ奪つていく。たまに刃向かつてくる奴もいたが、全てトニーに済された。その時はまだ良かつた。

今では誰も刃向かわなくなつていた。トニーにしてみれば、まるで面白くない。

強い奴と命を懸けて戦い、それに勝つ。

そんなスリルがトニーにとつて一番の喜び、楽しみだ。

(「この仕事でここにつとは最後にするか……）

そんな事を考えながら、彼は最後の戦場に向かつた。

銃声が鳴り響く荒野。

二十人ほどの男達が一人の黒服の男に向けて発砲していた。  
だが、黒服の男にとつてそれは「拍手」  
その拍手に応えて踊るようにそれをかわす。

彼がひとつたび踊れば、一人、また一人と倒れていく。  
まるで、彼の踊りに魅了されたかの様に。

彼は二十人の観客を前に一人舞い続ける。

危険な状況にも関わらず、彼は常に笑い続けていた。

その笑顔はまるで悪魔のようにも思えた。

止まらない。止まらない。止まらない。

彼の踊りは止まる事を知らない。

それを物影から見ているアイリーンとコイ。

「あの人……イカれてるわ」

アイリーンは思つてゐる事を自然と口にしていた。  
いつ死んでもおかしくない状況で笑つていられるクサナギ。  
そんなクサナギにアイリーンは怖くなつていた。

「そうね、それは正しいわ  
「えつ？」

思つてもみなかつた返事。  
てつきり否定すると思つてゐたが、肯定するコイ。

「クサナギは、もう『恐怖』を感じない身体になつてるから  
「恐怖を感じない？」

「ええ。クサナギはある事件を境に、恐怖を感じないって自分で言つてた」

哀れんだ目でクサナギを見るユイ。

その姿は、どことなく悲しそうだつた。

「……聞いた話だけど、クサナギが子供の頃、突然路上で親がクサナギの目の前で惨殺されて、クサナギ自身もかなりの重傷。殺人鬼の気まぐれでクサナギは『生かされた』らしいわ」

「えつ！？」

「それから、クサナギは自分は『死んだ』と認識してる。だから、『一度死んだ人間が死を恐れるのはどうかしてる』って言つてた」

アイリーンはユイの言葉に驚いた。

クサナギは自分は死んだ人間だと認識している。

そんな事で恐怖を消せる人間などいない。

だが、彼を見れば本当に恐怖など無いように見える。

つまり、彼にとつてその事件は、それほどのトラウマ、もしくは恐怖だったのだろう。

それに比べれば彼にとつて、今の殺し合いなど

『遊び』に過ぎないのだろう。

「クサナギは死の恐怖を知らない。だからこそ、あの状況で笑つていられる。そういう人なの、クサナギは」

「ず、随分割り切つてるのね、ユイちゃんは」

「そうね。最初は少し驚いたけど、馴れれば意外と普通に見えてくるわ」

「最初？あれ？ユイちゃんは初めからあの男と一緒にやなかつたの？」

「違うわ。クサナギと出会ったのはある理由から。それから一緒になつただけ」

「理由つて……どんな理由?」

アイリーンはユイに尋ねた。

全く関連性がなさそうな一人。

片方は無口で無表情の白髪の少女。

もう片方は、地獄のような光景で笑みを絶やさない黒いグラサンの悪魔。

そんな相対的な二人に、自然と興味が湧くアイリーン。しかし、少女の口から出た言葉は意外なものだった。

「復讐

「ふ、復讐? それつて……」

アイリーンは言葉を続けようとした時、ふと周りが

静まり返ったのにアイリーンは気づく。

すかさずクサナギの方に視線を向ける。

そこには、たつた一人紅い銃を持った男が立っていた。

そしてそれは、彼のショータイムが終わった事を意味する。

クサナギの足元には屍の山が築きあがっていた。

クサナギは指を銃の引き金に引っ掛けでクルクルと回して遊んでいた。

「さてと、それじゃあ、お山の大将どうぞ対面といきますか?」

そして、アイリーン達の場所まで戻ろうとした時、どこからか拍手の音が聞こえてくる。

それはどうやら豪邸の方向から聞こえてきていた。

誰かがクサナギ達に近づいてくる。

「いや、たいした腕だ。見ててホレボレしちまつたよ」

渋い声が静まり返っていた荒野に響き渡る。  
そして、その声の主が姿を現した。

「！？ と、トニー＝ギャレット！」

アイリーンが青ざめた表情をする。

彼女にとつてこの男は、一番最悪な男だろう。

タツカーと同じく、町を滅茶苦茶にした張本人の一人。

「何だ？ アイちゃん知り合い？」

「気をつけて、こいつはタツカーの凄腕の用心棒よ」

クサンギとトニーが正面に向き合って対峙する。

二人の間に重い空気が流れる。

「しつかし、随分と遅い登場だな？ お仲間さん、皆あの世に出かけちまつたぜ？」

「何、あんなのは前座だ。真打ちってのは遅れて出てくるものだろ？」

？

トニーの言葉に、成る程、と頷くクサンギ。

そんなクサンギの無防備な様子を尻目に、口に葉巻をくわえ、火をつけるトニー。

そして、一服した後。

「なあ、お互ひ武器が銃だ。ここは一つ昔風な決着をつけないか？」

「昔風？」

「ルールは簡単だ。お互い、腰に銃を構えて俺がコインを弾く。そして、コインが地面に着いたと同時に相手を撃つ。

『早撃ち勝負』だ

トニーの提案に、少し戸惑うクサンギ。だが、あまり深く考えない事にしたのか、すぐさまオッケーと指で丸を作る。

そして、互いに十メートルほど距離を置く。

「いやはや、意外だね、ポニーさん」

「……トニーだ。何がだ？」

「だってね、さつきまで俺の戦いを見てたんだろ？　だったら、二十人を相手にしている時に、俺を背後から撃つ方が早かつたんじゃないの？」

「残念だが、俺は紳士ジョントルマンだからな。卑怯な事は嫌いなんだよ」

否。実はそうではない。

トニーと言う男は性根の腐っている男だが、腕は確か。彼がここまで上がったのには、一つの才能があるからだ。

一つは『銃の腕前』、そしてもう一つは『相手の技量を計る眼』だ。彼はクサンギの戦い方、癖、弱点を二十人のタツカーの部下を駒に指し計っていた。

そして、彼が出した結論は過酷なものであった。

運動量は常人の域を逸脱している。

クサンギが放つ銃弾は一撃の下に手下をほおむ。

一発たりともクサンギは無駄弾を使つていなかつた。どの角度から放たれた銃弾も、あたかも『視えている』かのよくなきで避わす。

故に、トニーは二十人の部下を捨て駒にした。

例え、この時にトニーが加わったところで結果は見えていたからだ。

ならば、少しでも勝率の高い手段を取る。

トニーは策を張り巡らせた。

まず、二十人の部下が死んだところでのうのうと拍手をしながら出てくる。

これにより、クサナギの警戒心、戦意を削ぐ。

更に、近づくことにより自分の有効射程に敵を入れる。

トニーの銃は連射には向いていない。

故に一撃勝負が望ましい。

それが『早撃ちなら尚更良い』

元々、彼の得意分野は『早撃ち』

彼の人生の中で一度たりともこの分野で負けた事は無い。

クサナギが早撃ちを承諾した時点で、彼は8割方

勝つたとふんでいた。

クサナギは知らず知らずの内にトニーの土俵へと足を運んでいた。

「すまないが、そのグラサンを外してもらえないか?」

「はあ? なんでだよ?」

「殺す前に相手の素顔ぐらい見たいからな」

「はつ、良く言つよ。……これでいいか?」

クサナギはサングラスを取る。

そこから、互いに違う色の瞳が出てきた。

一つは蒼く、凍てつくような瞳。

もう一つは、紅蓮のように紅く、燃えるような瞳。

サングラスの時とは違い、その表情は意外と優しそうに見えた。

「OK。すまないね、これから死ぬつていうのに」「な～に良いつて事よ、最後の願いぐらう聞いてあげないとね」

互いに笑みがこぼれる。

それはどちらも自信に満ちた笑顔。

『俺が勝つ』どちらもそんな感じの顔だ。

トニーは腰につけてあるホルスターの銃に手を掛ける。  
クサナギは腰にあるポケットに銃を突っ込み、手を添える。  
そして、それを離れて見つめるアイリーンとコイ。

じきに日が沈む夕暮れ時。

これほど決闘にふさわしい舞台は無いだらう。  
トニーはコイン持った手を自分の前に持ってくる。  
それをじっと見つめるクサナギ。

そして、コインは弾かれた。

だが、それは真上ではない。

トニーはあるう事か、真上に弾かずに、クサナギの顔めがけて弾いたのだ！

誰もが上に弾かれると思っていた状況を逆手にとった行動。

完全に不意をつかれた状況のクサナギ。

そう、トニーは最初からまともに勝負する気などないらしい。早撃ちでは負けた事が無い。

そう自負しておきながらも、彼は100%勝てる様にこのよつた愚行に出たのだ。

クサナギ側から見れば、コインで相手が見えない。

トニーは勝利を確信した。

普通なら確実にトニーの勝利だ。

そう、『普通の奴なら』だ。

夕暮れの荒野に銃声が鳴り響く。

一つの影が膝を折り、田の前の男に許しを乞ひまつく。

「ば……馬鹿な！？」

驚きの声を上げたのはトニーだった。

彼の手に銃は無く、その代わりに手を撃ちぬかれた跡が残っていた。  
トニーの銃は無残に地面に転がっていた。

そう、先程の銃声はクサナギのものだったのだ。

「いやー、残念でした。申し訳ないが、あなたの行動は  
『見てる』からね」

笑いながらクサナギはトニーに近づいて額に銃口をつける。  
そして、笑っている顔から一気に顔つきが変わる。  
その形相からは凄まじい怒りが見て取れる。

「さて、この世に言い残す言葉は無いか？　”クソ野郎”」

クサナギの声がトニーを震え上がらせる。

トニーは後悔した。

タツカ一の用心棒になつた事、自分のしてかした事を。

「ま、まつてくれ……わ、悪気はなかつたんだ。  
も、もう一度チャンスをくれないか？ 今度はしつかりと  
「イインを真上に」……」

その震えるトニーの言葉にクサナギは。

「あ～、そういうえば最初に言つてなかつたな？」  
「な、何をだ？」  
「俺、紳士じやジエントルマンないから、そういうの氣にして  
ないんだ。……じゃあな」

そして、もう一度銃声が鳴り響いた。

「ひつひいいい！？」

あられもない姿であたふたと喚く一人の男。

それは、紛れもなくタツカーダ。

ガタガタと逃げ場の無い豪邸で必死に目の前の男から逃げようとする。

黒いサングラスに、紅い銃を片手に持っている男から。

「いや～、まさか本当に鳥頭とはね～、まさにチキンっ。」

などと、ジョークをかますクサナギ。

そして、その後ろからコイとアイリーンがついてくる。

「そ、そんな！？ と、トニーの奴は！？」

「ん？ ああ、あいつなら外でお寝んねしてるぜ？ 永遠に

そう言って、クサナギは手を合わせて合掌する。

タツカーノ顔がみるみる青ざめていく。

「ゆ、許してください！ お願ひです！ この通り！」

タツカーノはその場で土下座をする。

その様子を見たクサナギは呆気に取られていた。

「だとさ？ どうするの、アイちゃん？」

「えつ？ えつと……とりあえず、私だけでは決められないわ。

町の人達の意見も聞かないと

「あいよ、了解しました～」

クサナギはため息をついて後ろを振り向く。

その時だった。

タッカーは近くの地面に隠しておいた銃を取り出し、クサナギに向けて発砲したのだ。

だが、信じられない光景を目にする。

クサナギはタッカーのほうを振り向かず、首を少し傾けただけでその銃弾を避けたのだ。

だが、ほんの僅かにサングラスに掠り（かすり）、サングラスが地面に落ちる。

「……やれやれ、今日はほんっと厄日だよな」

ふう、と一息つくと、一瞬でタッカーの方に振り向き、額に銃口を当てる。

燃えるような紅蓮の瞳と凍てつくような蒼い瞳がタッカーを睨む。その視線は見るもの全てを殺してしまいそうな殺気に満ちていた。

「ちょっとまつて！ そこまでしなくていいわ！」

アイリーンが懸命に叫ぶ。

先程のトニーの時と同じで、クサナギは怒りに身を任せている状況。今にも引き金をひきかねない。

「関係ないね。人を騙したり、人を後ろから殺そうとする奴が俺はだつきらしいなんでね」

そして、引き金を引いたとした瞬間。

「あ、あんた、その日はまさか……『レッド・アイ』の連中か？」

タッカーが苦し紛れともどれるその言葉に、

クサナギの顔が豹変する。

額に当てていた銃口をはずし、タッカーの胸倉を思いつきり  
鷲掴みにする。

「貴様！ 何を知っている！？ 『レッド・アイ』の連中の  
何を！？ 言え！」

タッカーを片手で持ち上げ、ガクガクと揺さぶる。  
クサナギは鬼気迫る表情でタッカーを問い詰める。

「し、しらない！ ほ、ほんとにしらないんです！  
「嘘をつくな！ 言わなければ……！」

「クサナギ」

今にも暴れだしそうなクサナギを止めたのはコイの声だった。  
針のように鋭く、冷徹さも兼ね備えたその声はクサナギを制止する。  
クサナギは舌打ちをした後、タッカーを地面に落とす。

「本当に知らないのか？」

「は、はい！ ほ、本当に知らないんです！ ただ一度だけ  
出会つただけです」

「どんな奴だ！？」

「あ、あんたのような紅い瞳に、長い刀をもつた男だ」「何時だ……何時会った！？ 何処で！？」

再び、今にも掴みかかりそうな雰囲気で尋ねるクサンギ。

「い、一年前、『アクアレイク』って町だ」「アクアレイク……本当だな？」

首を力ク力クと縦に振るタッカー。

それを聞くと、クサンギはギリギリと歯軋りをする。

そして、踵を返して豪邸を後にしようとする。

「待つて！ まだ報酬も払つてないのにビコニー！？」  
「報酬は要らない。あえて言つなら、今その男から貰つた

そして豪邸を後にするクサンギとユイ。

だが、入り口の所でピタリと動きが止まる。

不思議に思ったアイリーンはクサンギ達に駆け寄ると、そこには町の住民が武器を持って豪邸に駆けつけていた。

「えっ、監どうしたの！？」

「あ、アイリーンさん！ 無事だつたんですか！？」

実は、あれから皆で話し合つた結果、このまま殺されるより皆で協力して立ち向かおうと、こうして駆けつけたんですが……

住民は周りに転がっているタッカーの部下を恐る恐る見つめる。

住民達もその現場を見て、終わってしまったのだと確信する。そんな住民達の蜂起を見たクサンギは。

「ほ～、あんた達もやればできるじゃないか？」

感心、感心。と、腕を組んで頷くクサナギ。

そして、その横で相槌をうつコイ。

「だ、だけど、あんた達が既に終わらしてくれたんだり？」

俺達は何も……」

「か～！ 分かつてないな

あちゃ～と、額に手を当てるクサナギ。  
そして、住民達に指をビシッと指す。

「いいか、こうしてあんた達は立ち上がった。その心が  
大切なんだよ。じやなきや、また今回の様なことが起るぜ?  
その気持ちを大切にな」

それじゃあ、と、立ち去ろうとするクサナギ達。  
しかし、住民の一人がクサナギ達の道を塞ぐ。

「ん？ 何だ？」

「あ、あんた達は俺達の命の恩人だ。せめて、飯などの恩返しを  
させてくれないか？」

「あ？ と、他の住民に賛同を呼びかける。

そして、それに頷く住民達。

クサナギはその言葉に頭をガシガシとかきむしむ。

「いいんじゃない？ クサナギ」

「コイ？」

「確かに、先を急ぎたい気持ちは分かるけど、こうして皆

お礼がしたいって言つてくれてるんだから

「けどな……」

「それに」

「？」

「私、お腹すいた」

その言葉を聞いたクサナギは呆気に取られる。  
そして、ハイハイと小さな声で返事する。

「んじゃあ、悪いんだけど、お言葉に甘えさせてもうつていいかな  
？」

「！　ああー、勿論だともー！」

住民達によつて、クサナギ達は一晩厚いもてなしを受ける。  
タツカーは住民達の意向で、牢屋に入れられる事に。  
もともとタツカーはトニーや部下無しでは何も出来ない小悪党。  
こうして、住民達は本当の意味で助かったのだ。  
住民達のお祭り騒ぎは一晩中続いた……。

そして、夜が明けた早朝。

一つの影が荒野を歩いている姿があつた。

「ねえ、クサナギ」

「ん？　何だユイ」

「町の人たちにお別れ言わなくて良かつたの？」

「ああ。そんな必要ないしな」

ズルズルとトランクを引くユイの足が不意に止まる。  
何事かと思いユイに近づくクサナギ。

「どうした？　コイ」

無言である方向を指差すコイ。

その方向をじっと見つめるクサンギ。

すると、煙を上げながら何かが近づくのが見える。

緑色のジープ。

そして、それを操縦しているのはアイリーンだった。アイリーンはクサンギ達に追いつくとジープを止める。そして、軽やかにジープから降りると。

「ちょっと！　勝手に出で行くなんて酷いじゃない！」

「ん？　何でだ？　べつに酷くないだろ？」

「あのね……あんたまだ報酬もらってないでしょ？」

「えっ？　だからそんなのいらないうて言わなかつたか？」

そのクサンギの言葉に頬を膨らませるアイリーン。顔には青筋を立てていた。

「私もついていく

「……何？」

「だ・か・ら、私もついていく。貴方達についていけば何か特ダネにありつけそうだし」

「と、特ダネ？　何言つてるんだお前は？　せつとあの町に戻れ」

「あれ？　言わなかつた？　私はフリーの記者なの。元々、あの町の住民じゃないって訳

「な、なんだと！？」

「あそこでの事件はあれでお終い。だから貴方達についていくって決めたわけ」

「お、お前はあの町の住民じゃないのにあんな事してたのか！？」  
「勿論。どうも私、正義感が強いタイプみたいだから」

「その所ヨロシク、ヒュインクしていくるアイリーン。

開いた口がふさがらないクサナギ。

そして、いそいそとジープに乗り込むユイ。

「おい、ユイ！ なにその人らしいの車に乗り込んでるんだ！？」

「……歩くの疲れた」

「お……おまえって奴はああ〜！」

「まあまあ、こうやってユイちゃんも私を認めてくれたんだし、先を急ぐんでしょ？ だつたら乗ればいいじゃない」

クサナギは納得のいかない表情。

しかし、ユイは全く動こうとしない為、助手席に渋々乗り込む。

そして、リクライニングを最大にして寝そべり、

胸ポケットから代えのサングラスを取り出し、それをかける。

「ねえ、あなたサングラス外した方がカッコいいんじゃない？」

「わかつてないね～アイちゃん。このグラサンは俺のチャームポイント。これないと俺の魅力半減なのよ」

「それ、本気で思ってるの？」

「勿論」

「……クサナギはイカれてるから」

「どうせイカれてますよ」

ハハハと、いつもの自然な笑い顔がクサナギに戻る。

こうして、奇妙な三人の旅が始まった。

## 第一章　『白銀の義手』

辺境の星「イシュタル」ここは自由な星。

しかし近年、様々な犯罪がはびこる為に『ある組織』が設立された。その組織の名前は『ヴァンファーレ』

このヴァンファーレは町の運営権利を明け渡す事により、その町をあらゆる犯罪から市民を守る事を保障するというものだ。

運営権利のみで、町の所有物、市民の財産、それらに手を出さない事も約束している。

そんな好条件の為に依頼が殺到。

ヴァンファーレは1年足らずで、イシュタルの半分ほど町を手中に治めたのだった。

この『プリズムシティ』もヴァンファーレによって守られている一つ。

以前の『ウエスタンス』とは違つて、町は緑や水に恵まれており、人が町に溢れかえっていた。

そして、このプリズムシティの最大の特徴は、ガラス張りの高層ビルの多さにあつた。

所狭しとそこら中に生えるガラス張りの高層ビル。

それらは太陽光を乱反射し、光輝く。

その様子からこの町は『プリズムシティ』と呼ばれている。近代的な建物が多いイシュタルの都会の一つ。

町中を覗いてみれば、規則正しく立ち並ぶ店の数々。

そして、その中の一つの食事処と呼ぶより、レストランと言つたほうがぴったりな内装の飯屋で……。

「すいませ～ん、ジャンボカレー、杏仁、イシュタル丼、  
それでおかわりお願ひしまーす。あ、あとミルク。  
ジョッキでね」

口に食べかすをこれでもかと、いわんばかりにつけたサングラスの  
この男がいた。

テーブルの上には綺麗に食べられた皿の山が出来上がっていた。  
それを啞然と見つめるアイリーン。  
いつもの事だと割り切ってクサンギの隣でジョッキで  
酒を飲むユイ。

「ん？　どうした？　食べないのかアイちゃん？」

全然箸が進んでいないアイリーンを不思議に思ったのか、  
口に物を入れた状態で喋るクサンギ。

「あなたのその食欲見えてると食べる気も失せるわよ」

と、嫌味をたつぱりつけた声で答える。

それじゃあと、アイリーンの飯も頂くクサンギ。  
その行動に呆れてものが言えないアイリーン。

「しかし、あれだね、この町はやけに治安がいいね？」  
「そりや当然よ、なんたつてヴァンファーレが守っているから」

「ファンファーレ？」

「ヴァンファーレ！　アンタ知らないの！？　超がつくほど

有名な組織」

「知らん」

「ユイに、知ってるか？ と顔を向けるクサナギ。しかし、ユイも首を横に振る。がっくりと肩を落とすアイリーン。

「仕方ないわね、説明してあげるから聞いててよ？」

「ういーい。ヨロシク！」

「……ヴァンファーレが設立されたのはちょうど1年前。あまりにイシュタルの犯罪率が高い為に結成されたいわば武力組織よ。彼らは町の運営権利と引き換えに必ずその町を守つてみせると約束してくれるのよ」

「ほー、そりやまたご大層な。本当に守つてくれるの？」

「ええ。以前私も調べた事があつたけど、ヴァンファーレが守つてくれている町は、他の町と比べて圧倒的に犯罪が少ないわ。まあ、やり方が結構きついっていう事もあるけど」

「きつい？」

「犯罪者に対しては容赦がないのよ。例えば、この場で私達が食い逃げしたとして、ヴァンファーレは私達を『殺し』にかかるわ」

「……まじ？」

「それ位容赦が無いって事。だから下手に犯罪も出来ないわけ

クサナギはスプーンを口に入れたまま硬直。すかさずユイに今の残金を聞いていた。

「大丈夫よ、私だつてお金は持つてるから」

「そつか、そりや良かつた。すみません！ おかわりを……」

「あのね、限度は考えてね？ あんた食べ過ぎだから」

その後、クサナギは腹が一杯になりご満悦。  
爪楊枝を口にくわえて背もたれにもたれかかる。

つまようじ

一方コイは、トランクの中から何種類かのパーツをテーブルの上に取り出し丹念に調べていた。

他の者から見ればコイのこの行動はガラクタで遊んでいるようにしか見えないだろ？

「コイ、『レイドリック』の調子はどうだ？」

「三番の弾がちょっと少なくなってるのと、一番、四番のフレームにほんの少し歪みがある。けど、予備のパートで何とかなるから、特に問題ない」

淡々とした口調で話すコイ。

そして、その言葉に興味を持つた人が一人。

「ねえ、レイドリックって何？」

アイリーンの目が輝く。

大体の想像はアイリーンにもついていたが、それ故に興味深々であつた。

めんどくさそうに顔をしかめるクサナギ。

「銃の名前だよ。ダサイ名前だろ？」

「あれ？ アンタが決めた名前じゃないの？」

「俺ならこんなダサイ名前じゃなくて『ゴージャスブラッド・クサンギ』

っていうカッコいい名前に……」

「……レイドリックで良かつたわ。それにしても、変わった銃よね？ 貴方達の銃。あんなの見たことないわ

テーブルの上に置いてある銃のパーツ。

それらはどの部品がどの部分に当たるのかがアイリーンには

さつぱり分からなかつた。

ただ、この少女の手によつてこのパーツが命を宿す。  
その事だけは分かつっていた。

「まあ、この銃は特殊で、えつと、なんだっけ？ タキヨクホーホ  
ケ？」

「……多局面想定方式拳銃」

「そう！ それだユイ！」

「な、何？ その名前？」

「……簡単に言つと、どんな状況にも対応できる銃。パーツの組み  
合せに

よつて、『一番』から『六番』までの種類の銃に変更できる」

説明できぬいクサナギの代わりに説明するユイ。

だが、説明している時のユイの顔は何処と無く嬉しそうだった。

「そんなんにあるの？」

「まあ、アイちゃんが見たのは一番と二番の一一種類だつたかな？」

「ええ。他の種類はどんのが有るの？」

「まあ、それは出た時のアイちゃんのお楽しみにしどきなさい。  
……だけどだな～」

急に眉間にしわを寄せるクサナギ。

その理由がわかつているのか、ユイも顔をしかめる。

その二人の変化に『惑うアイリーン』。

「えつ？ どうしたの？ 何か問題あるの？」

「ど～しても『六番』だけは好きになれないんだよね、あれだけは

「……私も」

一人してため息をつく。

その様子に驚きを隠せないアイリーン。

この「一人に」これほどまで言わしめる六番の存在。

「ど、どんなの？」

「うーん、何ていうか『使う所が無い』武器かな？ 全く、あんなの作るオバサンの神経疑うぜ」

やれやれと、クサナギは肩をすくめる。

彼ほどの使い手に、使う所が無いといわせる武器。

アイリーンはそれも興味を引いたが、それよりも初めて出てきたあの銃の作り手の名前の方が気になつた。

「オバサン？」

「そう、オバサン。この銃を作った人で、一言でいうならバケモノ？」

「クサナギ、それ、先生の前で言ってみたら？」

「ハツハツハ、言えるわけ無いだろ？ 多分あの人の事だから、

『よく言った。どうやら私の教育が行き届いてなかつたようだな？ なに、たまたま偶然にもお前の墓穴を作つておいてやつっていたから、

その中でたっぷり反省しておけ』 何て言われかねないからな

笑いながら凄い事を話すクサナギ。

『冗談よね？ と口の端が引きつるアイリーン。

そして、ユイのパートの点検も終わり、これから仕事を話し合う三人。

「それじゃあ、当面の目的は『アクアレイク』に行くのね？」

「ああ。そこで『レッド・アイ』の連中を捕まえねればいいが  
「レッド・アイって何なの？」  
「な、に、アイちゃんは知らなくていい」

アイリーンは直ぐに反論しようとするが、  
サングラスの奥で見える殺氣じみた目がそれを遮る。  
今はまだ聞かなくても、後で分かる。そう考えてアイリーンは  
この場で聞く事を断念した。

「……ここからアクアレイクは一〇日はかかるわね。それに、  
その間にある『ハイドタウン』が問題ね」  
「？ ハイドタウン？ それが何の問題があるんだ？」  
「まあ、行つてみればすぐにわかるわよ。それじゃあ出発は何時？」  
「今からだ。早いところ行きたいからな」

クサナギの言葉にコイも頷く。

アイリーンもそれに反対する理由もない。

三人はすぐさま出発しようとするのだが……。

「なんだと！ てめえ！？ もう一度言つてみろ！」

レストランの奥の方がなにやら騒がしい。

三人は椅子から身を乗り出しその方向を覗くと、二人の男が  
揉めていた。

一人は肩に刺青いねずみを入れた腕つぶしに自慢がありそうな  
筋肉質の屈強な男。

そして、その男に絡まれている男がいた。

外見は20代前半と思われる。

サラッとしなやかそうな肩まで伸びた赤い髪。冷静さを漂わせる  
鋭く細い眉と眼つきに、吸い込まれそうな黒い瞳。

顔はやや瘦せており、若干頬がこけているように見えた。  
そして、もつとも目を引くのは灰色の擦り切れた外套アンマ  
全身を包むその外套は、まるで何かを隠すような印象を  
漂わせる。

彼は、外套から片手を出して刺青を入れた男を無視して、  
テーブルの上にある紅茶を飲んでいた。

「何々？ もしかして喧嘩の予感？」

そんな波乱の予感を察知して、ワクワクと嬉しそうに喋る  
クサナギ。

彼の予感は当たっていた。

外套の男はそんな雰囲気ではなかつたが、刺青を入れた、ゴロッキは  
一触即発の状況になっていた。

そんな様子に周りの客は知らないフリをするか、クサナギのよう  
に観戦にしゃれ込んでいた。

慌てて、店の男従業員が一人の下へと駆けつける。

「ど、どうかなさいましたか？ お客様？」

「この野郎がだな、俺の服に紅茶を撒らしやがつて、弁償しろって  
言つたら、お前のような奴に弁償する必要は無いって言つたんだ  
よ」

そういうて、刺青を入れた男はシャツについた染みを

従業員に見せ付ける。

そこには、ほんの少し、注意して見ないと分からぬぐらいいの染みがついていた。

「わ、分かりました。こちらのほうで弁償いたしますので」

「ほう、そうかい。じゃあ、2万オームでいいわ」

「に、2万！？」

この世界では、2万オームといつのは破格。

刺青の入れた男のシャツがいかに良い物だとしてもシャツといつのは精々200がいい所。

「お、お客様、さすがにその値段は……」

「何だ？ 払えないってのかい？ それじゃあいつのやせ男に払つてもうしかないよなー！？」

再び外套を着た男のほうを睨む刺青の男。

外套を着た男は、紅茶のカップを静かに置いて立ち去る。その行動に刺青を入れた男は腹を立てたのか、後ろから肩を掴み、男を振り向かせて胸倉を掴む。

「いい度胸してるよな？ 僕を無視して立ち去るとするなんてよ！」

「……か？」

「あん？」

外套着た男がボソボソと小声で喋る。

一瞬、何を言っているのか聞き取れなかつた刺青の男。だが、彼の言葉を聞いて一驚する。

「死にたいのか？」

はつきりと聞こえた。

外套の男は一言一言はつきりと聞こえるように喋る。  
その言葉からは刺青の男におびえた様子など無く、  
逆に刺青の男の顔から血の気が引く。  
だが、引くに引けないのか、手を離そうとしなかった。  
その様子を傍から見ていたクサナギ達は、

「ちよつ、ちよつと！ 助けたほうがいいんじゃない？」

「ん？ どつちを？」

「あの外套の人に決まってるでしょ！？ あのままじや殺されちゃう  
わよ？ あの筋肉ダルマに」

「ん~、そうだな」

よつこらしょ、とゆつくりとクサナギが立ち上がる。

それと同時に事件は起きた。

「し、死んだぞテメエー！」

刺青を入れた男が殴りかかる。つとする。

その瞬間、『何か』が宙を舞つた。

最初それが何なのか分からなかつた。  
ドサッと、地面上にそれが落ちると。

「ヒツー！ きやあああー！」

女性客の一人がそれを見て悲鳴をあげる。

手羽先のように見えるそれは、紛れもなく刺青の男の手だった。  
刺青の男を見ると、外套の男を掴んでいた手首から先が無くなつて

いた。

「えつ？ お、俺の……て、手があああ！？」

何秒かの硬直の後、自分の手がなくなっている事に気がつき、錯乱する刺青の男。

対称的に、外套の男は至って冷静だった。

外套の男の手には何時の間にか刀が握られていた。不気味な赤い刀身。

そして、更に驚くべきはその刀を握っていた腕だ。外套から出したもう片方の腕は白銀の義手。

形は西洋の甲冑に近く、それは肩まで伸びていた。

外套の男は義手だというのに、誰の手にも止まらぬ速さで男の手首を一閃したのだ。

店の中は一瞬にして阿鼻叫喚に包まる。

ある者は店から飛び出し、ある者はその光景に氣を失つ。クサナギ達はそのどちらにも属さず、外套の男を観察していた。

「……あの義手、凄い」

「えつ？」

「あれは多分レア・メタル「ニムバス」製。ニムバスは強靭な強度と共に

柔軟な弾力を持つ希少金属。あれを義手の素材に使えば細かい動きを

可能にできる。また、随所にクロツドカーボン鋼を使用して、強度をあげてる。あの義手なら、生身の腕を超越する……あんな義手作れるの

先生(ぐらい)」

コイが感嘆の声をあげる。

普段無口の彼女がこれほどまで饒舌になると云ひ事はそれほど凄いものだという事は容易に想像できる。そんなコイとは裏腹に、クサナギの顔は険しくなっていた。

「……コイ、一番だ」

「！？ あなたまさか、戦う気じゃないでしょうね…？」

クサナギはアイリーンの言葉を否定しなかつた。

ただ無言で外套の男を見つめていた。

一瞬でレイドリックを仕立てるコイ。

そして、クサナギは何時も通りの紅い銃を手に外套の男に近づいていった。

外套の男は、錯乱する刺青の男を見下した表情で見つめる。赤い刀を手にゆっくりと近づく。

「警告したはずだ。これ以上俺に構うと死ぬと  
「ひつ…」

凍りのような冷ややかな印象をうける外套の男の声。もはや刺青の男に抵抗する気は無かつた。だが、外套を纏つた男は止めを刺しにきていた。赤い刀の切つ先が天高く伸びる。そして、そのまま一気に振り下ろされよつとした瞬間。

「はい、そこでストップね」

陽気な声が赤い刀の動きを止める。

もう数秒その声が遅ければ刺青の男は真っ一いつだつただろう。

「……貴様、何のつもりだ？」

外套を着た男は声の主を睨みつける。

そして、ゆっくりとクサナギの方へと体を向ける。

「いやなに、そちらの人はもうアンタに刃向かう気がなさそうだから放つておいてあげていいんじやない？ ほら、行つた行つた」

クサナギは手で追い払う仕草をする。

刺青の男は逃げるようその場を後にする。

外套の男は刺青の男をそのまま見逃す。

しかし、それは矛先がクサナギへと変わった為であった。

「しかし、アンタ本当に止め刺す気だったの？」

「当然だ。俺は相手が誰であろうと遠慮はしない。

邪魔する者は殺す。それが蠅はえのような存在でも」

「……それはあの筋肉ダルマを助けた俺も同罪って事？」

あちやー、そりや勘弁。邪魔したのは悪かったけど、いい加減

その刀を俺に向けるのやめてくれない？」

外套を着た男は刀を納めようとはしなかつた。

それは、目の前のチャラチャラした男が危険だと察していたからだ。男は言葉ではなだめようとしているが、体中からどす黒い殺氣を放っていた。なにかキッカケがあれば直ぐにでもこの男は自分を殺しにかかる。

そんな印象を外套の男は感じていた。

「……それは無理な相談だ。貴様の方こそ、その銃を外したらどう

だ？」

外套の男はクサナギの腰に着けてある銃に目を向ける。

「断る。アンタが刀を納めるのが先だ」

互いに危険を察知しているのか、譲らぬ意見。

二人の間の空気が重くなる。

次の瞬間には何が起こってもおかしくない状況。

クサナギは腰にある銃に手を添え、外套の男は刀を握り直す。そして、次の瞬間。

「ちょっと！ あの場を止めただけでいいのに、あんた何ちょっとかいだしてるとよ！ バカ！」

アイリーンの声が響く。

アイリーンはクサナギの後頭部を殴り、腕を引っ張つて店を出ようとするとが。

「……待て」

外套の男の声でピタリと動きが止まる。

何を言われるのかドキドキしている様子のアイリーン。

「サングラス、貴様の名は？」

「ん？ 人に名前を尋ねる前に、自分の名前を出すのが常識だぜ？」

「……クリス。クリス＝ラーズレイだ」

挑発とも思えるクサナギの言葉にあっさり応じたクリス。その意外な反応にチッと舌打ちをするクサナギ。

「クサナギだよ」

「クサナギか……貴様に一つ聞いていいか?」

「あん?」

「貴様は『片腕に蛇の模様をつけた女』を見た事はないか?」

「知らないね」

「……そうか」

そうして、クリスは外に出ようとする。

クサナギとすれ違はずまに。

「今度邪魔をすれば次は無いぞ」

ポソリと言葉を告げてレストランを後にするクリス。

クサナギはそんなクリスの後姿を見ながら。

「けつ、次に会う時が無いだろうよ」

これがクサナギとクリスの最初の出会い。  
彼等の因縁はここから始まった。

彼の姿はあまりにも浮いていた。

綺麗な町の外觀にそぐわぬ擦り切れた外套。

周りの者たちは皆、彼の事を浮浪者か何かと思っていた。

彼も本来ならこんな町に来る予定は無かつた。

自分が本来居る場所とは違い、あまりに眩しそぎるこの町。久しく忘れていた感情が微妙に甦る。

だが、すぐにかき消す。

もし、その感情が戻るとすれば、自分の目的が達成した時だ。

彼は目的を達成する為にこの町に出向いた。

だが、結局の所彼の無駄足に終わってしまった。

ならばこの町に長居は無用。

そう思つて彼は直ぐに町の出口へと向かつていた。  
だが……。

「兄さん、ちょっと顔貸してもらえる?」

彼の目の前に4人ほどの悪人面の男がいた。

面倒な事に巻き込まれる前に出て行きたかった。

彼の心中は穏やかではなかった。

目的は達成できなかつた。

先程のサングラスの男との出会い。

そして、この足止め。

……歯がゆい。そう、感じていた。

彼は4人に四方を囲まれある場所へと連れて行かれる。

そこは工事途中でほつたらかしにされたビル。中はだだっ広い空間が広がり、スカスカの状態。

露骨にむき出しの鉄骨。

地面には資材と思わしき鉄部品が無残に転がっていた。

唯一、外からは見えないようビル全体にシートがかけられていた。

彼は中へと連れられて行く。

そして、目の前には先程の手首を失った男が居た。男の周りに10人ほどの手下と思われる男達がいた。その状況である程度彼は察した。

「さつきはよくもやつてくれたな、ええ！」

怒りに満ちた声がビルに響き渡る。

周りにいる男達が隠し持っていた武器を取り出す。彼はそんな状況でも一切取り乱したりしなかった。それどころか。

「ふん、怪我の具合は至つて良好のようだな？ いつその時片腕を切つてしまえばよかつたか」

挑発とも思える言葉を発した。

そんな言葉を受けた刺青の男はこめかみに青筋を立てていた。

「なんだとテメエ！ お前のおかげで俺は手を失ったんだぞ！？」  
「の落とし前はきつちりさせてもいいぜー。」

周りの男達がじりじりと彼ににじみよってくる。次の瞬間に待っているのは一方的な暴力。

そう、思っているのは彼等だけ。

外套を着けている彼だけは違う事を思っていた。

「……くだらんな」

周りの男達を見渡して彼はポツリと呟く。  
そして、彼は一振りの刀を取り出す。  
不気味なほど真っ赤に染まつた刀身。  
そして、それを持つのは白銀の義手。  
彼はある時断言した。

『相手が例え蠅のような存在であろうとも容赦はない』

そして、彼はそれを実行した。

「あ～あ、何やつてるんだ？ 僕は」

愚痴をこぼしていたのはクサンギ。

それもその筈、彼らはこままだプリズムシティに居た。

「……アイリーンがデパートで買い物に行くなって言つたから」「居る」

「そんな事は分かつてるよ！」

ぐあ～！ と、デパートの前のベンチに寝転がるクサンギ。その隣でちょこんと座つているコイ。

「……ねえ、クサンギ」

「ん？ 何だコイ」

「あの時、どうしてあんなにあの人に寛つかつたの？」

先程のレストランでの出来事。

あの時のクサンギは異常だとコイは感じていた。

そんなコイの言葉にクサンギは……。

「さあ？ なんでだるい？」

とぼけた顔をしてコイの質問をかわす。

しかし、クサンギには心当たりがあつた。

だが、そんな事をコイに話した所で何の意味も無い。

それ以後言葉の無い状態が続く。

そんな状況に先に根をあげたのはクサンギだった。

ベンチから体を起<sup>レ</sup>し、おもむろに立ち上がる。

「よし、ちゅうと散歩でもするかコイ」

そういうて、コイの手を引き、辺りを散歩する事に。  
デパート周辺は人ごみが多い為、少しはなれた場所を散歩に選ぶ。  
そこは、開発途中のビル街。

何も無いため、人は好んでこんな場所には来ない。

少し、デパートから離れたが、直ぐに戻れば問題ないだりつと  
たかをくくるクサンギ。

だが、運命とはなんと皮肉なものか。

「クサンギ」

「ん? どした?」

最初に異変に気づいたのはコイだった。  
急に立ち止まり、あたりを見回す。

「……変な臭いがする」

何処からともなく異臭がする。

この異臭はどこからだらうと探すコイ。

まるで何かに取り憑かれた様に歩き出す。

そして、ある工事中のビルへとクサンギ達は誘われる。  
中に入るクサンギ達。

そこで見たのは……。

「つー?」

絶句した。

何かの絵画のように地面に出来上がった血の模様。その周辺には彫刻のように出来上がった人の山。

中心にはそれを作り上げた人間がいた。

彼は入り口にいるクサナギ達に気づく。

「また、貴様か」

「……クリス」

クリスの顔や外套には返り血がついていた。

この惨劇は普通の者でも計り知れない衝撃だろう。

しかし、クサナギにとってこの光景はそれ以上のものだった。

「お前がやつたのか？」

「ああ。先程の仕返しらしい、馬鹿な奴らだ」

あたりを見回すと、先程の刺青の男が目を見開いて息絶えていた。

クリスは刀の血を拭う。

そして、鞘に納めようとした瞬間。

「ぐ……た、助けて」

微かに生きている者がいた。

必死に這いつくばってクサナギ達に助けを乞う。

クリスはそれを見て、その男に近づく。

「おい！ もういいだろ！ そいつは見逃してやっても！」

クサナギは必死に叫ぶ。

今からでも遅くない、すぐに治療すれば助かるかも知れない。だが、クリスの決断はあまりに無情だった。

「断る。生かせば後で何かと面倒になるからな」

クリスは刀をその男の背中に勢い良く突き立てた。  
男は一瞬悲鳴をあげて息絶えた。

その光景を目の当たりにしたクサナギは……。

「クリイイイス！」

クサナギの中で何かが切れた。

もはや、その表情は親の仇を見るような怒りの形相。  
腰にあつたレイドリックを咄嗟に抜く。

「なぜだ！ そこまでやる必要はなかつたはずだろー。」

「そこまでだと？ 言つたはずだ、俺は例え蠅のよつ存在でも  
容赦はしないと」

その言葉に、クサナギは唇を噛む。

クサナギも悪人に対しては容赦はしない。

だが、抵抗する力がない者には手をあげない。  
しかし、クリスは違う。

彼は、例え相手がだれであろうと殺す。  
それはまさに、あの時の殺人鬼と一緒にだ。

「貴様はまさかこんな奴らに同情でもしているのか？」

「同情？ するわけないだろ。こんな事になつたのはあくまで  
こいつらの自己責任。だが、そこまでする必要もなかつたのも  
事実だろうが！」

死体をみると、大半の者は背中からぱつたり切られている。

それが意味するもの。

それは、クリスが逃げようとした奴らも見逃さなかつた文字通り皆殺しであつた事を表す。

「……貴様は俺と同じ人間だと思つたが氣のせいか」「何？」

「あの時に見せた殺氣、あれは生半可な人間が見せられるものではない。

本当の地獄を見た奴だけが出せる憎悪。貴様にも『殺したい人間』がいる。

違うか？」

クリスの言葉が胸に刺さる。

彼の言つている事はほぼ的を射ていた。

しかし、彼とクサンナギは決定的に違う所がある。

「ああ、確かに俺は殺したいほど憎い奴がいる。だがな！　お前みたいに誰でもいいから殺したい奴と一緒にするな！　俺は、そんな奴がだいつきらいなんだよ！」

その言葉に、クリスは静かに刀を構える。

前のめりの前傾姿勢。

腰の辺りに両手で刀を握り、踏み込むと同時に切る構えだ。

「……奇遇だな、俺も貴様みたいな甘つちやうい奴は嫌いでな。それに、言つたはずだ。今度邪魔をすれば次は無いとな」

一瞬で空気が張り詰める。

もはや戦いは避けられない状況。

この時一人は互いに共通して感じているものがあった。  
それは……。

『田の前に居るこの男が気に食わない』

昼下がりの工事現場。

町並みから外れたこの場所に人は通らない。辺りでは工事のために使う鉄を打つ音が響く。カーン、カーンと一定のリズムで打たれる鉄。

それはまるで、今から行われる殺戮劇の幕開けを知らせる鐘のようだつた。

銃を構える男と、刀を構える男の睨み合い。互いに相手の隙をうかがつ。

距離だけで言えば圧倒的にクサンギが有利。目測で30mは離れている。

一步一歩進んだだけで刀が届く距離ではない。刀が届く距離になるまでに確実にクサンギなら倒せる。後は、クリスが動いたと同時に銃を合わせれば良い。

「……なるほど、そういう事か」

静かにクリスが口を開く。

だが、その口調は話し合ひをするような気配ではない。

「貴様はどうやら『今回』は俺に対して憎んでいるようだな」

「今回?」

「店で出会つた時と殺気が違つ。どうやら貴様はある時

俺では無く、違う人間を照らし合わせていたようだな。

貴様の殺したい相手……それは刀を使つ相手のようだな

「……さあな」

無愛想に答えるクサナギ。

だが、手ごたえを感じたクリスは尚も喋る。

「そうだな、貴様を倒した後はそこの幼女でも切り刻むとするか」

そういうて、チラリとコイの方を見るクリス。

その挑発とも思える言動が戦いの火蓋を切る。

クリスの言葉にキレたクサナギが引き金を引く。

しかし、それをクリスは待っていた。

相手が「先に」放つ一発目。

先程からクリスに向かっていた銃口。

故に、その弾道は簡単に予測できてしまうのだ。

クサナギが放った弾丸とすれ違ひに外套がなびく。

30mほどあつた距離を一瞬にして0にしてしまう程の踏み込み。

その踏み込みの速さに驚くクサナギ。

そして、踏み込むと同時に電光石火の一撃が繰り出される。

クサナギの体を横一文字に切り裂こうとする赤い牙。

しかし、その行動は先程の構えから予測できていた。

幾ら剣速が速いとはいえ、あまりに単純すぎる。

当然のように、クサナギは後ろに身体を引いて避ける……が。

「フッ！」

横一文字に切りさしうとした牙は、クサナギの体の中心で止まり、  
『突き』に変わる。

しかし、これも予測の範囲内。

クサナギは体を捻つてコレも避ける。

この瞬間、クリスの体は大きくバランスを崩していた。

すかさずクサナギは銃をクリスの額に向けようとする。  
この至近距離ならまず外さない。

だが次の瞬間、信じられない事が起る。

クリスは生身の腕を刀から離し、義手の腕のみで刀を握った状態にする。

そして、義手が180度回転したのだ！

自然と刀の刃が切り上げる形に変わってしまったのだ。  
横薙ぎ 突き 切り上げの三段構え。

元よりクリスはこの切り上げこそが本命。

そして、赤い牙がクサナギの首めがけて襲い掛かる。

本来なら有り得ぬ刀の軌跡。誰が避けられるだろうか？

そう、この行動が『分かつて無ければ避ける事はできない』だろう。  
それはクリスが一番分かっていた。だが……。

「つ！」

何と、クサナギは間一髪この攻撃をかわしたのだ！

クサナギは態勢をわざと崩し、背中から地面上に落ちる動作でコレをかわす。

そして、すかさずクリスめがけて銃を発砲。  
地面に倒れる前に3回引き金を引く早業。

銃弾をかわしつつ、クリスは慌てて距離を離す。

クサナギが立ち上ると、かけてあつたサングラスが落ちる。

どうやら、先程の一撃で切れていたようだ。

もし、後コンマ一秒遅れていれば首がとんでいたろう。  
互いに態勢を立て直し、次の行動に備える。

「ユイ！ 予備パートで『一番』だ！ 時間は計つておいてやるー！」

言葉と同時に真横に走り出すクサナギ。

それと平行に走り出すクリス。

一定の間隔をあけての並走。

走りながら銃を発砲するクサナギ。

しかし、クリスはいつもたやすくそれを刀ではじく。

この状況はクサナギにとって最悪だった。

少しでも攻撃の手を緩めれば奴に近づかれてしまう。故に無駄弾と分かつていても撃たなければならぬ。

更にビルの中は広いとはいえ、限界がある。

このまま並走し続ければいずれ壁に激突する。

壁に激突するのが先か、弾薬が尽きるのが先か。

いずれにせよ、そうなつてしまつと後はあの赤い刀が容赦なく

襲い掛かるだろ？

「チツ！ しつこい男は嫌われるぜ！」

「残念ながら、既に嫌われているからな」

クサナギは途端に足を止めてクリスを向かい一つ。

レインドリックを弾薬がある限り連射する。

しかし、クリスは弾丸をはじいて少しずつ間合いを詰める。幾ら自動拳銃で連射が可能としても一発一発の間に確実に誤差がある。

その誤差がクサナギにとっては命取り。

そしてついに、スライドが停止して機関部が露出した状態になる。

『ホールドオープン』だ。

これは、銃に弾薬が切れた事を意味するものである。

この状態の意味をクリスは知っていた。

すかさず、弾薬を補充させる前にケリをつけようとクサナギに

走りこむ。

そして、一の太刀はいらぬといわんとばかりに渾身の袈裟切りを放つた。

コレでクサナギの胴体は真っ一つになると思われていた。しかし、クサナギの体に触れる寸前に歪な金属音がビルに響き渡る。

「なつー!?

驚いた声をあげたのはクリス。

彼が放った渾身の袈裟切りは、紅い銃によつて防がれていた。しかし、彼が驚いたのは刀を止められたことではない。

”切れなかつた事だ”

彼の刀は全てを一刀の元に両断する切れ味。

実は、彼の刀はある名工が作り上げた最強にして最凶の刀。如何なる物を切り続けても刃こぼれ一つしない刀。

彼自身、今まで切れなかつたものなど無かつた。

しかし、今この場で初めて切れぬものと出会つたのだ。

愕然とするクリス。

その隙をクサナギは見逃さなかつた。

すかさず、クリスのみぞおちに渾身の蹴りをぶちかました。ぐつ、と苦悶の声を漏らしながらクリスはわずかにのけぞる。

その距離は僅かにしる、クサナギにとつては願つても無い事だ。

何しろこの時既に、新しい武器がクサナギめがけて飛んできていたのだから。

彼を倒すにはどうすればいいか?

答えは簡単、彼を近づけさせなければいいだけだ。

彼に対してもう銃は、近づけさせない事、”手数”の方が重要。そう考へると、「一番」の自動拳銃や、「三番」の散弾銃などではあまりに役不足。

クサナギはコイから投げられた銃を片手で受け取る。

クサナギが選んだ銃、それはトリガーの前方に大きくはみ出たマガジン

が特徴的な銃サブマシンガンで、一分間に約600発程度の連射が可能な銃。

「短機関銃」

引き金を引き続ける事で連射が可能なフルオート式の銃だ。

更に、このレイドリックの短機関銃は珍しい事に、マガジンは二つ存在する。

一つはトリガー前方に付けられており、そしてもうひとつは、銃の後方に大きな筒状のマガジンが備えられていた。

このレイドリック「一番」の短機関銃の弾数はおよそ300を越える数の

弾がマガジンに装填してあるのだ。

すかさずクサナギは短機関銃をクリスに向けて放つ。  
如何に彼が銃の弾をはじけるとはいえ、絶え間なく襲い掛かる一秒間に60発もの凶器をどうやって返せよつか？

彼自身にそんなスキルは存在しない。

だが、はじき返す術すべを彼は知っていた。

彼は義手だけで刀を手に持つと、義手の手首が高速で回転し始める。

一瞬にして、刀のバリケードが出来上がる。

クサナギは発射し続けたが、バリケードを突破する事はできなかつた。

銃弾を100発近く残し、対峙する。

クリスもクサナギの攻撃が止むと同時に義手の回転を止める。

「ちつ、えらく便利だな！ その義手！」

忌々しそうに見つめるクサナギ。

あまりに豊富すぎる義手のギミックに呆れていた。

「……貴様のその銃、誰が作ったのだ？」

「お前に教える必要は無い」

「そうか……ならば、貴様のその『眼』はなんだ？」

「これは生まれつきだ」

「誤魔化すな。青い眼の方はともかく、貴様のその『紅い眼』は普通ではない。何か仕組みがあるな？」

「……」

「先程の三段攻撃のかわし方、あれは反射神経の類たぐいでは無い。恐らく貴様は俺の攻撃を『分かつて』いた違つか？」

クリスの予測。

それはほとんどの的中していた。

彼の眼は普通の眼では無く、常人ならざる能力ちからを備わっているのも確かなのだ。

しかし、その仕掛けを話すほどクサナギはお人好しではない。

「だったら何だつていうんだ？ 謄めて死んでくれるか？」

「残念だが、俺にはやらなければならない事がある。それが終わるまで

死ぬわけにはいかない」

「そりや残念。志半ばでここで俺に殺されるからな」

「貴様が只者でない事が解つた今、全力で葬るとしよう」

クリスがそう告げると、刀を鞘に戻す。

そして、腰を僅かに落とし、生身の手を鞘に添え、義手で刀の柄を持つ。

そして、彼は告げる。

「 ジョクト（開放）」

瞬間。異常な光景を目の当たりにする。

義手の接合部分が開く。いや、『展開』していく。  
肩の辺りから金属の羽のようなものが生えてきていた。  
接合部分が開いた所からは異様な音が発せられる。  
まるで、うめき声のよつた音。

「！ クサナギ、ダメ！」

「！？ コイ？」

遠くで見ていたユイが大声で叫ぶ。  
彼女にはわかつっていたのだろう。

あの義手が展開した意味。

そして、あれから発せられる一撃が『必殺』であることも。  
ユイの叫びでクサナギは一瞬で悟る。  
あれと戦つてはならない、逃げろと。  
しかし、既に向ひの準備は終わっていた。

「今更気づいても遅い、何処に逃げよつともこの距離の時点で  
貴様の負けは決まっている！」

そして、彼の一撃が放たれようとした時……！

突然、車がビルの中に突っ込んでくる。

それに気を取られるクリス。

ほんの一瞬。

しかし、その一瞬がクサナギ達の生死を分けたのだ。  
すかさず、短機関銃を放つクサナギ。

しかし、先程と同じように鞘から刀を抜いてバリケードで防ぐ。  
そして、車がクサナギ達に隣接する。

「ちょっと！ 早く乗って！」

「アイちゃん！ 助かった～」

緑色のジープに乗り込むクサナギとユイ。

そして、急発進でその場を後にした。

それを黙つて見逃すクリス、いや、諦めたといったほうが正しい。

そして、彼はジープが見えなくなつてからその場を後にした。

「いや～、助かったよアイちゃん。でも、どうやってあそこが  
わかつたの？」

「念のためユイちゃんに頼んで発信機を付けさせてもらつてたのよ。  
それで、ビルに近づいてみたらあの状況だったわけ。でも、何が  
あつて

あんな状況になつてたの？」

「あ～、それは道中で話すわ。しかし、これでアイツともおせりば  
つて

訳だな」

ふは～、と安堵のため息をつくクサナギ。

コイも顔には出しては無かつたものの、ほっと一息ついていた。

「クサナギ」

「ん?」

「時間……何秒だった?」

「……えっと、その、6分32秒06かな?」

と、今頃ストップウォッチの針を止めるクサナギ。コイの顔がみるみる不機嫌そうになっていく。

「……もういい。今度から自分で作れば?」

「わ、悪い! だけどあの状況は仕方ないでしょ、コイ」

「知らない」

「ゆ~い~!」

アイリーンはそんな二人を見ながらクスクスと笑う。そうして、彼らは次の町へと向かった。

## 第三章『交わした約束』

俺は、この街が嫌いだ。

周りを見れば死んでいるように無気力な大人が道端で倒れている。  
水は汚い、空気も汚い、人間も汚い。  
そんなどうしようも無い街が俺の生まれた所だ。

だけど、こんな街でも楽しみがあった。

俺は何時も鉄屑をかき集めてそれを売る事で金にしていた。  
親なんてものは俺の場合初めからいなかつた。何時も一人だつた。  
そんな時、俺は同じ境遇の仲間と知り合いができた。  
いや、『友達』ができた。  
それからだ、楽しみができたのは。

「よお、待つた？」

「いや、今来た所」

俺達は仕事が終わると、何時も決めている場所へと向かう。  
そして、そこから一人で「ある場所」へと向かう。

「なあ、今日はどっちが勝つと思う?」

「俺は断然ハーディかな? 20戦全勝の無敗の王者」「でも今回の挑戦者のスレイガーダって負けてないよ?」

などと、談話をしながら向かう。

これから向かう場所は、本来なら俺達のような子供には「法度の場所」。

俺達はこそそと誰にも見つからないように地下の下水道に入る。ヘドロと汚水の匂いで鼻が曲がりそうだ。

狭く暗いパイプを通り、やがて見えてくる一筋の光。そこから賑やかな音が聞こえてくる。

そして目の前に現れたのは、丸い砂の舞台。

上からは太陽のように降り注ぐスポットライトの光。舞台の周りを囲む席からは罵声や歓声などが入り混じった不協和音。

そしてそれを一心に受け止める一人の主役が居た。

大人達はどういう目で「これ」を見ていたか分かない。

大方はショーやギャンブルの類たぐいだろう。

だが、俺達一人にとって「これ」は憧れだった。

他の遊びを知らないものもあったのだろう、俺達はこれが唯一の楽しみだつた。

白熱する戦い、豪快に決まる大技、果ての流血。

子供心に火がついていた。

いつも見終わると今日の話に夢中だつた。

互いに見た技を研究したりもした。

そうなると、見てるだけでは飽き足らなくなるのは目に見えていた。

実際にあの舞台に立つて戦つてみたいと感じ始めていた。

それから俺達は見よう見ま似で練習をしだした。

傍から見れば喧嘩をしているようにしか見えなかつただろう。

とても試合と呼べるようなものではなかつた。

単純な殴りあいだ。

見ては考へ、試しに殴りあい。

そんな失敗の繰り返し。

けれど繰り返す度に殴る拳はさまになり、蹴る足は鋭くなり、何時  
しか

殴り合いの域を超えていた。  
もつと強く、もつと強くといつ気持ちが何時しか芽生える。

それから何年も経ち、俺は決心した。

「えつ？ でていく？」

友人はやけに驚いた表情をしていた。

そして、俺を必死に引きとめよつとした。

「出て行つてどうするんだよ！？」「約束」はどうするんだよ！  
「だから、その為に出て行くんだ」

「えつ？」

「正直、これ以上は誰かに学んだほうがいいと思つし、確かめてみ  
たいんだ。

俺がどこまで通用するか

その言葉に友人は黙つていた。  
恨めしそうに俺を見る。

「……何時、帰つて来るんだよ？」

「3年……いや、5年以内に帰つてくる。その時、約束を果たそう  
ぜ」

「……絶対だぞ？ 絶対、絶対だからな！」

「ああ。お前に忘れるなよ？」

そうして、俺は15年生きたこの街と別れた。

その時、もう「俺」は一度とこには帰つて来れないとは思つてもいなかつた。

外の世界は新鮮だつた。  
見るもの全てが新しい。

街、人、食べ物。

そして、俺は片つ端から格闘に関する道場や建物に駆け込んだ。  
だが、その時気づいた。

俺がいた街でやつているモノとは実は全く別物であるといつ事に。  
それはまるで「遊び」だった。

防具に身を包み殴りあつたり、組み手からはまるで殺氣めいたものが感じられない。

あの街のような血生臭く、スリルと殺気に満ちた「あれ」とはかけ離れていた。

正直、それだけでもガツカリだった。

更に俺に追い討ちをかけるようにそれは起つた。

「あ……がつ」

言葉にならぬ声を発しながら腹を抱えてうずくまる男。

それを呆然と見る周囲の観衆。

それも当然、いきなりはいつて来た部外者、つまり俺によつてあつさり倒されたのだ。

”一番強い奴と戦いたい”

そつ、告げて出でてきたのが田の前でうずくまる男だ。  
他の場所に行つてもすべて一緒だ。

そう、俺は強くなる為にあの街を出てきたのに意味が無かつた。

俺は大会や道場を次々と乱入しては勝ち続けた。何時しかそれは噂となっていた。

噂を耳にして駆けつけてくる猛者。

けれど、その猛者たちは俺の前で誰一人として立っている者はいなかつた。

俺は一心不乱に戦い続けた。

どんな場所だろうと、どんな奴だろうと、どんな状態であろうと戦い続けた。

強くなれると信じて。

けれど、そんな日も長くは続かなかつた。

ある日、体に激痛が走る。

立つ事もままならない程の激痛。

あまりの痛みに、そのまま俺は道端に倒れこんだ。幸運にも通行人が俺を病院へと運んでくれた。

病院で伝えられる自分の容態。

それは、あまりに非情な死の宣告だった。

”君はもう、格闘技はできない”

医師からの言葉。

話によると、脊椎とやらの部分が損傷しているらしい。

普通の生活をするにはなんら問題は無い、けど、激しい運動などはもう出来ないだろうと。

これだけで済んだ君は幸運だったと、医師は笑って話す。だが、俺にとつてはそんな問題では済まされない。

何の為ここまでやつてきた？ もう出来ないなどでは済まされない。

誓つたんだあいつと。

だが、現実はあまりに過酷だ。

少しでも運動すれば発作のようになにに発生する手足の痺れ。  
ろくに力も入らない。

頑張れば頑張るほど虚しいほどの空回り。

そんな自分に悔しくて泣いた。  
もう……どうしようも無いと。

街を出て4年が経った。

俺はまだ病院にいた。

ベッドに横たわり、生きているのか死んでいるのか分からぬ俺が  
いた。

いつも、殺して欲しいとも思つた。

だが、そんなとき突然「奴」が現れた。  
そいつは花束をもつて俺の病室に現れた。

「あんた、誰だ？」

俺には身内はない。

かといって、そいつとは知り合いでなかつた。  
奴は、俺にこう言つてきた。

「私は、あなたのしがないファンの一人です」

そういうて微笑む男。

布に包んだ長い棒のような物と、鮮やかな紅い瞳がとても印象に残  
る男だった。

それが、俺が「俺」であった最後の記憶だった。



「なあ、『ハイドタウン』ってどんな所?」

車で移動中、助手席で横になつているクサナギが不意にアイリーンに尋ねた。

「ハイドタウン、別名『闇の街』」

「闇の街?」

「そう。他の街と比べて、とにかく「暗い」のよ。みるからに負の感情丸出しの街って言つた方がぴつたりね」

「……そんな街に行くのか?」

「仕方ないじやない、アクアレイクに行くルートは2つ。

一つは、ここから一週間かかる街に着いて、それから国境を

渡る許可書を最低一ヶ月発行を待つて行くルート。

そして、もう一つは3時間後に着くハイドタウンに行つて、

関所を通るルート。さあ、どっちに行く?」

「……すいませんでした」

そうして、クサナギ達はハイドタウンへと向かう。

ハイドタウンに近づくにつれ、舗装された道は少しづつ荒んでいく、遂には荒地となんら変わりない道へと変貌を遂げる。

周りの草木は枯れ、目の前には黒煙を轟々と噴き上げる街が見える。街の中は異常な状態だった。

家の壁は強固な鉄板で出来ており、家本来の温かみを感じさせない。

汚水や排煙による異臭。

道には浮浪者、店のキャッチ（呼び込み）らしき者が多く見られた。

アイリーンの言つたとおり、この町に『明るさ』など無かつた。全てが暗く、負の感情に包まれていると言つたのは過言ではなかつた。

その街を車で横断するクサナギ達。クサナギは周りを見渡しへー、ほー、などと声を上げる。

「どう？ 初めて来た感想は？」

「こりや酷い。みんな生きてるのか死んでるのか」

「まあ、大半は死んでるも同然じゃない？ どうせ『あれ』に金をつぎ込んだ人たちばかりだらうし」

「『あれ』？」

「私達には関係ないわよ。さてと、もつすぐ関所につくけど……まさかこの一年で変わつてないでしょうね？」

などと、アイリーンが一人言をブツブツと呟く。街中を進み、出口の近くに大きな門が見えてきた。

これが『関所』だ。

この場所だけはハイドタウンにふさわしくない厳重な警備が敷かれていった。

アイリーンは車から降りて、門番にエロカードらしきモノを手渡す。しかし……。

「な、なんですって！」

アイリーンの叫び声があたりに響く。

あまりの大きさに、横になつていたクサナギが飛び上がる。

アイリーンは門番と激しく口論をしている様子。

しばらくしてアイリーンが、がっくりと肩を落としてジープに戻つてくる。

「もー！ だからこの街嫌なのよー。」

アイリーンはハツ当たりのよつてガングンと車のハンドルを叩く。  
「どうやら、かなつて立腹のようだ。

「ど、どうしたの？ アイちゃん？」

「どうしたもうこうしたも無いわよ！ 変わってるのよ、IDカードが！」

もうこのIDカードは古くから使えなってー。まだ2回しか使つて無いのよー。」

「じゃあ、どうするんだ？」

「また買うしが無いわね。この街ときたら、トップが口口口  
変わるからその度に買い直しなのよ……」

「それもあれかい？ ヴアンファーとくいう組織の陰謀？」

「違うわよ、この街はヴァンファーに任せない街の一つ。

それだから、偉い奴が変わっていくのよ。しかも、この街にはあまりメリットが無いから、

ヴァンファーも無視してるらしくわよ？」

愚痴をこぼしながらアイリーンはIDカードを購入する為、  
関所を離れる。

そして、再び街中へと出向く。

「どうこう」とー。？」

本日2度目のアイリーンの怒鳴り声が店に響き渡る。  
アイリーンは店主と口論になっていた。

「だからお嬢さん、ＩＤカードは値上がりしたんだよ」

「あのね、上がつたつて言つても限度があるでしょ！　限度が！」

「ほつたくりもいい所よ！」

「ま、まあアイちゃん落ち着いて……」

「あんたは黙つてなさい！」

「は、はい」

さすがのクサンギも怒ったアイリーンにたじたじだった。

「で？　本当は幾らなのよ！」

「本当に三万オームだよ、なんなら他の店にも尋ねてみたらどうだい？」

店主のその態度にさすがに嘘ではないと悟ったのか、アイリーンは財布の中身を調べる。

しかし、財布の中身を見たアイリーンが顔をしかめる。

そして、申し訳なさそうにクサンギ達のほうを見る。

「ねえ、幾ら持ってる？　一万あれば何とか買えるんだけど……」

「ユイ、幾らぐらうだ？」

「……2万」

「おっ、買えるじゃないか！」

ほつと一息つくクサンギ達。

これでアクアレイクに行くと一安心していたが。

「あー、お嬢さんたち、言つておくけど一人三万オームだからな？」

その店主の言葉にクサナギ達の表情が強張る。  
ギギギと口ボソトのように店主に顔を向けるクサナギ達。

「な、なんじゃそりやーーー!? 本当に詐欺じゃないか!」

「ただ一つ言える事は、あんた達貧乏人が買える代物じゃないって事だよ!」

カカカと高笑いをする店主。

その店主を見たクサナギ達はといづど。

「ユイ、『一番』だ

「わかった」

大きく縦に頷くユイ。

どうやら一人共我慢の限界がきていたようだ。

「あなた達の気持ちはよく分かるけど、抑えて。後が面倒になつちやうから」

とうあえず現状のお金では到底足りない為、一旦店を出るクサナギ達。

その後、他の店も訪ねてみるもの、やはり店主の言つたとおり同じ値段で売られていた。

八方塞がりのクサナギ達。

とうあえず、近くの店で一休止をすることに。

「ねえ、これからどうする?」

テーブルの上でぐつたりとなつているアイリーンが尋ねる。

その姿は生も魂も尽きたといった状態。

「これからもう一つのルート行ってたら凄い時間がかかる……かといつてここに居座つてもお金が増えるわけでもないし……あれ？ どうしたのよ？」

アイリーンがブツブツと話をしていた時、なにやらクサナギの様子がおかしい。

目の前には注文されたパスタと飲み物が置いてあった。

「な……」

「な？」

「なんだ……？ この不味い飯は？」

わなわなと拳を振るわせるクサナギ。

眉間にしわを寄せていることからして、よほど立腹のようだ。

「本来複雑な味わいを出すはずのソースに味気が無く、若干の固さが残るはずの麺は

茹ですぎてフニャフニヤ……何とこいつお粗末さー。」

「あんたどこの食通み

「許せん、ちよつと行つて来る」

「ちよつー？ やめてよー 恥ずかしいからー」

食べ物に関して怒るクサナギを必死に止めるアイリーン。

そんなやり取りをしている時に、背後から誰かが近づいてきた。

「あら、もしかしてと黙つたらやつぱりナガジヤない？」

「ん？」

背後を振り返ると、そこには赤いスースに身を包んだ女性。

流れるようにサラサラとしていて、背中の辺りまで伸びた金色の髪。瞳は鮮やかな翠色。

形の整った唇が彼女の大人の魅力を引き出す。ふくよかな胸とスレンダーな体型が見るモノをどうにする魔性の美女がそこにいた。

「あれ？ もしかして『サラ』か？」

「お久しぶりね、ナギ」

「……久しぶり、サラ」

「ユイちゃんもお久しぶり、元気だった？」

サラと呼ばれる女性の言葉に頷くユイ。

そして、ゆっくりとクサナギの方に近づき、クサナギの頬に手を当てる。

「あなたに会えなくて寂しかったわ、ナギ」

「そうか？ 僕はそれでもなかつたが？」

「もう、そういう時は嘘でも寂しかつたって言つものよ？」

そして、クサナギの首に腕を回すと手を伸ばすサラだったが、強引に一人の間に割つてはいるアイリーンに阻止された。

「ちょっと、この女性は誰なの？」

キッと睨みつけるアイリーン。

みるからに不機嫌そうな声と表情を見せていた。

「ああ、そういえばアイちゃんは知らなかつたな、サラの事は」「サラ？ へえ、私はちゃん付けで、なんであの女性はちゃん付けされてないのかしら？」

「まあ、サラは最初からサラで呼んでたからな……」

「じゃあ、私もアイリーンで呼んでよ」

「いや、アイちゃんはアイちゃんだから」

「あ、あんたって人は」

あまりのクサナギの鈍さにガッカリするアイリーン。

「それで? この女性とは……その、どうごう関係なの?」

アイリーンはしどろもどろにクサナギに尋ねる。

「どうやら心中は穏やかでは無い様子。」

あまり聞きたくない答えが返つてこないかどうか不安なのだろう。そんなアイリーンの心など知つてるわけもないクサナギの返答は。

「ああ、サラは商人なんだよ」

「えつ? 商人?」

「武器の調達を主にやっている死の商人なんだけど、俺達に弾薬を手配してくれているのも」

「このサラなんだ」

クサナギの言葉にまつとめるアイリーン。

「そういうえば、弾薬の手配してもうつてもいいか? どうも切れかけてるみたいでな」

「ええ、いいわよ。けど……」

「けど?」

「今までの弾薬の費用を払つてからにしてもらわないとね~?」

そういうと、ポケットから電卓を取り出し凄まじい勢いではじき出す。

電卓を打ち終わった後、金額をクサナギ達に見せる。それを見た三人の目は点になっていた。

「……なあ、サラ」

「ん？ 何かしら？ ナギ」

「コレ、二桁ぐらい多くないか？ は、八百万オームって……」

「多くないわよ？ それでもおまけしてるぐらいなんだから。それにあなたの使う弾は

特別製が多いのよ、ミスリル製やらダラス鋼製やらで

「悪い、無理だ。今俺達はIDカード買ひお金をどりやつて十面しようか悩んでるぐらいい金が

無いんだよ……」

「IDカード？ なんでそんなの必要なのよ？」

「まあ、実はな……」

事の大筋をサラに話すクサナギ。

それを聞いたサラはなにやら不敵な笑みを浮かべていた。

「ねえ、な~ぎ~」

甘い猫なで声でクサナギを呼ぶサラ。

その声にビクリと肩を震わせるクサナギ。

「良かつたら私がそのIDカードの費用と弾薬代を工面してあげてもいいわよ~？」

「えつ？ ほんとうですか！？ サラさん」

突然のサラの申し出に驚きを隠せないアイリーン。

「コニコと微笑むサラに対して、クサナギの方は顔に手を当ててながら

不安を隠せない様子。

「勿論。でもそれは、私の頼み」と聞いてくれたらの話なんだけ  
どね~?」

「嫌だ、断る、サヨウナラ」

好条件に迷う事無くきつぱりと否定するクサンギ。

そして、やそくさと店から出ようとする。

そんなクサンギを引き止めるアイリーン。

「ちょっと… 折角の申し出を断る気?」

「アイちゃんはこいつの依頼を知らないからそんな事言えるんだよ  
! 過去こ

弾薬の工面で請け負つた依頼が2回あつたが、とんでもない依頼  
だった。

「もつ!」

ヤダヤダと首を何度も横に振る。

とは言うものの、現状を打破する方法はサラの言つてゐる条件を飲  
むしかない。

しかし、それを分かつていながらもクサンギは拒否し続ける。

「ねえナギ、話だけでも聞いていいかい? この仕事は多分あなた  
向き……いえ、

”あなたにしかできない”仕事なのよ」

その言葉にクサンギは戸惑つた。

こんなに下手に出るサラを初めて見たからだ。

その為自然とサラの依頼に興味を持つてしまった。

クサンギは店のソファーにドスンと勢い良く座り、その隣にユイと

アイリーンが座る。

それを見たサラは向かいに座った。

「それじゃあ、依頼を受けてくれるのね？」

「ああ。その代わり、弾薬とエロカードの方は……」

「分かつて、ちゃんと工面しておくれ。それじゃあ、依頼の方なんだけど……」

ごくりと喉を鳴らす三人。

一体どれほど恐ろしい依頼が飛び出るのかドキドキした様子。

そして、サラの口から出た言葉は。

「とりあえず、店、でましょうか？」

「は？」

店を出たサラは、どこかへと歩き出す。  
それを後ろからついていくクサンガギ達。  
街中を抜けて、直ぐ近くの郊外にある大きな一軒家へと向かっていく。

レンガ造りで煙突付きの立派な一軒家。

サラは、ドアをノックして直ぐに中へと入っていく。

それに連れられてクサンガギ達も中へ。

家の中は木目調の板張りの床で、周りには様々な生活用品が置かれていた。

そして、その家の中央で車椅子に座っている20代前半の青年がいた。

髪は黒く、気さくな感じのする青年だった。

青年はサラが来たのに気づくと、車椅子を器用に操つて近くに寄ってきた。

「サラさん、今日はどうしました？」

彼は少しだけ微笑みながら話しかけてきた。  
明るい、はりのある元気な声だった。

「実は、あなたの依頼に応えれそうな人物が見つかりました」

「！　ほ、本当ですか！？」

「はい。こちらにいる人物です」

そういうてサラはクサナギの方に手を向ける。  
サラに紹介されて、クサナギは僅かに頭を下げる。  
車椅子の青年はクサナギの方へと近づく。

「初めてまして、僕の名前は『カミュ』といいます」

「クサナギだ」

カミュと呼ばれる青年が握手を求めるようにクサナギに手を伸ばす。  
クサナギはそれに応える。

「で、どんな依頼なんだ？　サラ」

「あ、それは私の方から説明した方がいいですね……」

そういうて、カミュは少し表情が暗くなる。  
彼は震える声で。

「私の友人を、唯一無二の友人を救つて欲しいのです」

「救つて欲しい？」

壁にもたれかかって驚きの表情を見せるクサナギ。

そして、ちらりとサラの方を見ると大きなため息をついた。

「おい、何処が俺にしか出来ない仕事なんだよ」

「まあまあ、とりあえず話を全部きいてからそういう事を言って欲しいわね。」

それに、簡単に越した事も無いんじゃないかしら？」

サラの言葉に確かに、と納得した様子のクサナギ。

そして、カミユの話が続く。

「友人とは子供の時からの長い付き合いで、それは仲が良かつたものです。」

そして、彼が大きくなり、この街を出て行こうとしたときある「約束」を

かわしたのです

「約束？」

「まあ、とりあえず聞くより見たほうが早いわね。階で地下に行つて見ましちゃうか？」

「！ 地下！？ も、まさか『あれ』に行くつもりー？」

サラの提言に驚くアイリー。

そして、サラに連れられるままにカミユの家をでて、街中へと再び進む。

カミユの車椅子を押しながら人ごみを掻き分け、街の奥へと進んで

いく。

街の奥には人の出入りが激しい地下へと降りる階段があつた。中に入ると、そこには街とはまた別の顔が存在していた。

それは街とは比べ物にならないほど人の多さ。

等間隔で存在する出店のような賭博場。

昼間のように明るい地下の灯り。

皆、殺氣だつているのが見て取れる。

クサナギ達はその光景におもわず目を丸くしていた。

「これはまた凄いな、アイちゃん」

「まあ、この街の本来の姿がこれだもの。地下の賭博街。

上の道端で倒れている人はこれにつき込んでどうしようも無くなつた人たちよ」

「なるほどね。確かに俺達とは関係ない場所だわ」

サラは周りの賭博場に目もくれずにどんどん奥へと進んでいく。  
そして、着いた先は大きなドーム。

中に入るとそこには割れんばかりの歓声が聞こえてくる。  
中央には砂で敷き詰められた丸いリングが存在していた。  
そして、それを囲むように満員の観客がいた。

そんな熱気に包まれた場所では否が応でも血が騒ぐ。

「なあサラ、ことと依頼人の仕事と何の関係があるんだよ？」

「依頼人の力ミコさんは実は、ここで王者として4年間君臨していたのよ」

「ええっ！？ ほ、ほんとうですか力ミコさん！」

サラの言葉に思わず驚くアイリーン。

そして、そんなサラの自己紹介に照れる力ミコ。

「ええ。確かに私は以前はここで王者として君臨していました。

けれど、それから膝を故障してやむを得ず引退したんです」

「そりやまた残念」

「……ええ。ですが、本当に残念なのは友人と戦えなかつた事です」

「友人と戦う?」

「子供の頃、私達は約束したのです。もし、私達が大きくなつたらこの闘技場の決勝戦で

優勝を賭けて観客の心に残るような戦いをしよう」と

名残惜しそうに試合を観戦するカミュ。

彼自身はまだ戦つてみたいと思っているだらう、だが、彼の足の容態はそれを許してくれない。

「決勝戦つて……」れつてトーナメント方式なのか?」

「ええ。一日5人ほどのエントリーで争われる小さな大会形式です」

「しかし、これとアンタの約束と何の関係があるんだ? まるつきり関係ないよう

思えるが?」

そう、あくまでカミュの依頼は「友人を救つて欲しい」ここで彼らの関係や経緯を

知つた所で依頼とは関係なさそうに思われる。  
だからクサナギは訊ねた。

「……それはもうすぐわかります」

「あ?」

カミュの発言に戸惑いを感じるクサナギ。

だが、彼の言葉の意味は直ぐに分かる事になる。

突然の大きな歓声。

どうやら試合の決着がついたようだ。

一人は地面にひれ伏し、もう一人は高々と拳を天に突き上げ勝利をアピールしていた。

これがどうやら決勝戦だつたらしく、トロフィーらしきものと、紙袋を持った係りの者があてきていた。

それを受け取る勝者。本来ならこれで終りを告げる。

だがそれは、たつた一人の男が乱入してきた事で妨げられる事になる。

選手がリングへと上がる入り口から一人の男が入ってくる。

男は嘴のような仮面をつけていた。

仮面には覗き穴と思われる箇所もなく、あれでは何も見えないはず。

しかし、それを男は気にした様子はない。

体格は恐ろしいほど磨き上げられた筋肉の鎧。

上半身は裸で、その体つきは無駄な贅肉など見当たらない。

その男を見るや否や再び割れんばかりの歓声が鳴り響く。

だが、それはほとんどはいって来た男に対する罵声であった。

「な、なんだあいつは？」

不気味な仮面の男を見て驚くクサナギ。

一目見て分かるのだろう、彼は只者では無い、”バケモノ”だと。

「あれが……私の友人です」

「！？ はあ！？ あれがアンタの友人だと！？」

「はい。彼は毎日試合の優勝者と戦う為に現れる存在。そんな彼を他の方々は幽<sup>ゴースト</sup>靈と呼んでいます」

カミコと話している間にあの、ゴーストと優勝者が戦いを始める。優勝者は先程の戦いの疲れを知らないかのよつた機敏な動きを見せる。

それに対して全くその場を動こつとしないゴースト。

あつという間に、ゴーストの死角、背後へと回りこむ優勝者。

そして、鋭くキレのある拳をゴーストの後頭部めがけて放つ。

本来のルールであれば、この行為は反則である。

だが、これは試合ではない。

その為、ルールなど存在しないただの殴り合いなのだ。

優勝者の鋭い拳がゴーストの後頭部を捉える寸前。

ゴーストは優勝の方を見る事無く、首を前に倒してそれを難なくかわす。

しかし、優勝者は間髪いれず連続して拳を放つ。

だが、ここで驚くべき事が起こる。

ゴーストは優勝の方を見る事無くまるで後ろに田でもついてるかのように

それを全てかわし続けたのだ。

あまりの異常な光景に皆言葉が出ていなかつた。

優勝者の顔がみるみる青ざめていく。

そこで初めて気づいたのだろう、自分には手におえぬ怪物であることに。

そして、ゴーストはゆっくりと優勝のほうに振り返ると同時に、何かハンマーで叩いたようなつぶれた音が響く。

それがなんのか理解するのに数秒。

それはゴーストが優勝者の顔面を拳で貫いた音であった。

あまりにありえぬ出来事。

そして、ゴーストは用が済んだのか、再び入り口から帰つていった。

皆の時間が動いたのは「」の出来事から数分後だった。

クサナギ達はあの惨劇を田の辺にした後、カニコの家へと戻つてきていた。

皆重苦しい空氣に包まれていた。

「……大体の内容は理解できたが、本当にお前の持つてくれる依頼といつのは

最悪だな！」

くそっ、と苛立ちを隠せないクサナギ。

彼を救つて欲しい、それは彼を倒せと同義語なのだ。

「他に方法は無かったのか？」

「あればとっくにやつてるわよ。遠くから銃で狙つたり、武器で倒そうともしたけど

全員返り討ち

「ヴァンファーレとかいうのには頼らなかつたのか？」

「駄目よ、もし頼つて倒したとしてもその後が大変よ。賭博場なんか法度だし、

直ぐに潰されてみんな暴動にでるわよ？」

「それじゃあ、結局

「そう、あなた頼み」

手を合わせてお願ひをするサラ。

頭を搔きむしり、見るからに不満そうなクサナギ。

「ナギも最初は結構のり気だつたじやない」

「こんな依頼だつて分かつてたら最初からやらない。しかし、本当

にあれが友人なのか！？

「ありやあ、バケモノだぞ！？」

「ええ、確かに彼は私の友人です」

「根拠は！？ 証拠は！？ もしかしたら別人かもしれないぞ？」

「どうか、別人だろ！」

「証拠はありません。しかし、彼と分かるものが2つほどあります

「本当かよ？」

「はい。一つは彼は必ず決勝戦で勝つた相手と戦う事です。他の相手には手をつけません」

「……それはあなたの言つ約束と同じだからって事か？」

「はい。そしてもう一つ、彼は、小さく同じ言葉を呟いているのです」

「同じ言葉？」

「彼はこう呟いていました。「約束……果たす」と、それを何度も

何度も

「彼をつき動かしているのはあの時の約束なのでしょう」

カミコは目に涙を浮かべながら語る。

本来なら自分が約束を果たし、それで終わるはずだった。

だが、それは運命のいたずらとも思える故障により果たす事ができなくなっていた。

「お願いですクサナギさん！ 彼を！ 友人を！ どうか救つてくれださい！」

「お礼はさせていただきます！ どうか、どうか……」

カミコは泣きながらクサナギにすがりつく。  
一刻も友人を解放してやりたい一心の思いで。  
クサナギは頭を搔き、困った様子。

「しかしだな……」

「ナギ、あなたぐらいなのよ？ あんなバケモノと渡り合える同じバケモノは」

「おいおい、俺もバケモノ扱いかよ？」

「あのバケモノは何らかの方法で相手の攻撃を見切つている。

そして、あなたもその『眼』で相手の攻撃を見切れるんだし

「えつ？ サラさん、クサナギの眼って何かあるんですか？」

「ええ。彼の眼は『レギス』エウス＝クルス（全てを司る眼）』と言つて、

眼の神経を伝つて脳に直接干渉し、知りたい情報を瞬時にくれる眼。

例えば、相手の筋肉の動きやそれに伴つ予備動作から相手の動きを『予測』する事も可能で……」

「おいサラ！ 余計な事いうな！」

「え？ 別にいいじゃない？」

サラからもたらされる情報にただただ驚くだけのアイリーン。

それなら以前の銃弾を回避していたクサナギの行動も納得がいく。彼は弾丸の軌道が本当に『視えていた』のだろう。

そして、以前のトニーのあの行動も全てお見通しだったわけだ。

「それって、未来が見えているってこと？」

「勘違いするなアイちゃん、未来なんてものは『無い』未来なんてものは作るものだ。

あくまで『予測』だ。ただ、その確率は100%に近いだけという事だ

「それでも充分じゃない。それだったらあの人倒すのも簡単……」

「なわけ無いだろ。幾ら予測できたとしてもそれを回避できるかど

うかは別問題

「あ、成る程」

「でもナギ？ あなた達は結局エロカードが欲しいんだから選択肢は無いとおもうんだけどな～」

「ちつ、分かつたよ！ やりやあいいんだろうー？ だがな、一つ条件がある」

クサナギは真剣な表情でカミコのほうを見る。

その真剣な眼差しに思わず身構えるカミコ。

そして、クサナギの口から出た言葉は。

「美味しい飯をくれ。もつ、じいの不味い飯はこりごりだ」

そして、次の日になつた。

クサナギは大会にエントリーをして、個室の控え室にて待機していた。

しかし、ここで一抹の不安が残つていた。

「ちょっとあんた、銃の腕前はすごいのは分かつてるけど……今回  
は「素手」なのに  
大丈夫なの！？」

アイリーンは心配そうにクサナギに訊ねる。

そう。今回はあくまで格闘技。

当然の如く銃など使えるわけも無い。

「大丈夫、大丈夫。アイちゃんが俺を心配になる気持ちも分かるけ  
ど信用して欲しいな」

「あ、あんたね！」

「ナギ、死なないでね？ 私を一人置いていくなんて許さないんだ  
から」

「！ さ、サラさん！？」

「そのセリフで一体何人の男を騙してきたんだ？」

「あら、ばれた？」

おもしろくないわね、とフウとため息をつくサラ。  
そんなやり取りを見てドキドキしているアイリーン。

「まあ、どうせ勝つのはナギだろうし、その所は心配してないわ  
「はいはい。その『』期待にできるだけ応えましょうかね」

そして、係りの者がクサナギに時間を知らせに来る。クサナギは係りの者に連れられて控え室を後にしようとすると。

「ぐ、クサナギ！」

「ん？ どしたアイちゃん？」

「その……頑張って！ 負けたら承知しないんだからね！」

その言葉に僅かに笑うと、手をあげて応える。

そして、アイリーンたちは観客席へと向かう。

観客席に行くと、一人ユイが席をとつて待っていた。

「ごめんな、ユイちゃん。一人で寂しかった？」

「大丈夫、それよりクサナギどうだつた？」

「いつもどおりよ、全く、あいつに緊張感つてないのかしら？」

呆れた表情のアイリーン。

ふと、ユイを見るとなにやら紙を握っているのに気がつく。

「なにそれ？ ユイちゃん」

「……賭博券。クサナギが勝つと、5倍らしいから」

グッと握り締めるユイ。

その様子を見て困った表情を見せるアイリーン。

「えつと……幾らかけたの？ ユイちゃん」

「全財産」

「えつ！？ ど、どうするのよあいつが負けたら！？」

「大丈夫、クサナギは負けないから。それにもし負けたら……」「負けたら？」

「私が……殺す」

その感情がこもった声からはコイは本気だとアイリーンは察する。密かに負けないようになると、祈るアイリーン。

「大丈夫よ、ナギは必ず勝つわ」

「サラさん信用してるんですね、クサナギのこと」

「ええ。一応ナギとは長い付き合いで分かるわ、あの人の強さは」

「……サラさん、あいつとは何も無いんですか？」

「と言つと、男女の関係でかしら？」

その言葉に僅かに頬を赤らめ、こくりと頷く。

サラはそんなアイリーンの様子にすこしだけ微笑む。

「そうね。男女の関係では何もないわ、残念だけど

「ほ、本当なんですか？」

「ええ。そんなに気になるの？」

「だ、だって私より全然サラさんのほうが綺麗だし、もしかしてサラさんはあいつの事嫌いなんですか？」

「好きよ」

アイリーンの問いに即答で答えるサラ。

真剣な表情がそれが本気だという事も分かる。

「そ、それじゃあどうして？」

「まあ、彼が鈍いのが一番で、私も彼に素直になれないところね

「えつ？」

「怖いのよ彼に嫌われるのが。それならこのままでいいかなって……」

「カラさん……」

「さつ、そういう話はもうやめにしましょ。そろそろナガの出番だし」

ドラを叩く大きな音が場内に響き渡る。

そして、それに呼応するかのように大歓声が響き渡る。

『それでは、これより試合を開始いたします！ 選手入場！』

場内アナウンスが始まり、二つの正反対の入り口から二人の男が入ってくる。

一人はやさ男で背が高く、お決まりのサングラスをかけてリングに出てくるクサンギ。

もう一人は2倍ほどの身長で上半身が裸で隆々とした筋肉を見せ付けるスキンヘッドの男。

見た感じでは明らかにスキンヘッドの勝ちであろう。

故に、2倍と5倍の破格の換金率。

「ぐふふふ……お前さんも運が悪いな？ この「アイアン」の異名をとる

ジョージ＝ルーカスと相手とは」

スキンヘッドの男はニヤニヤと余裕の笑みを浮かべる。

自分の体格と比べてあまりに細いクサンギを格下の相手と判断した為だ。

「アイアイ？」

「アイアンだ！ 貴様なんぞ試合が始まつて10秒で片付けてやるわ！」

このリングに場外はない。

ルールは金的など危険行為は禁止で後は至ってシンプル。

「相手を倒せば勝ち」

そして、試合の開始を告げるドラが鳴り響く。

「死ねえー！　このキザ男がー！」

開始と同時にスキンヘッドの巨体が突っ込んでくる。

この狭いリングでは逃げ場が無い為、この戦法は非常に有効だ。

そして、クサナギの体をわしづかみにしようと左右から巨大な手が襲い掛かる。

しかし、クサナギはそんな事はどうに「視えている」

スキンヘッドの両手が空を切る。

「ど、どこだ！？」

左右を見渡すスキンヘッド。

しかし、クサナギはどこにも見当たらない。

そもそもその筈、彼は両手が迫り来る時に男の懷に入る事で回避していたのだ。

そして、間抜けにも周りを見渡すスキンヘッドの男の顎めがけて拳を放つた。

それは空気を切り裂くような鋭い一撃。

相手も予想だにしていなかつた攻撃の為、そのダメージは計り知れなかつた。

スキンヘッドの顔がのけぞり、バク転をするように巨体が宙に浮く。そのまま大の字にリングに沈む。

それで試合続行は不可能と判断したレフューリーが勝者の名前を告げた。

「勝者！ クサナギ！」

あまりに華麗で、予想できなかつた試合展開に場内は驚きと興奮の声に満ちた。

そして、それに応えるように拳を突き上げるクサナギ。

「す、」

驚きの声を上げるアイリーン。

そして、その隣でグツと賭博券を握り締めるコイがいた。

「だから言つたでしょ？ ナギは勝つって」

「サラさん」

「だつて勝つてくれないと私の30万が無くなつちゃうといつだつたもの」

「……サラさんも賭けてたんですか」

「ええ。これで、あの人弾薬代はチャラね」

上機嫌で話すサラ。

そして、この後もクサナギは勝ち、つとに問題の決勝戦へと辿り着く。

個室で待機しているクサナギ達に、思わぬ客が来訪する。

「あれ？ カミコさん？ ビーフしたんですか？」

アイリーンがカミコの来訪に驚く。

カミコは車椅子をたくみに操り、クサナギの待機している個室にはいつて来た。

「こよいよですね……クサナギさん」

「ああ、だけど、その前に一人勝たないと無理だがな」

「ええ。ですが、あなたなら大丈夫でしょう。それよりもその後が

……」

「分かつてるとよ」

決勝戦は前菜のようなもの。

メインディッシュはその後のバケモノだ。

カミコも心配でたまらないのだろう、だからこそいつやつて微力ながらも

応援に駆けつけたのだろう。

「なあ、カミコ」

「ハイ、なんでしょうか?」

「あんた言ったよな、あいつを『救つてやってくれ』と

「……はい」

「一言は……ないな?」

「はい」

クサナギの執拗な確認に戸惑いを感じながらも答えるカミコ。

そして、クサナギから思わぬ提案が出される。

「カミコ、あんたは観客席に行かずにリングの近くで見てろ」「えつ?」「えつ?」

「ちょっと、そんな事して大丈夫なの!? もし、あいつがカミコさんを……」

「そりゃ無いだろ、あくまであいつの目的は決勝戦の勝者と対決だからな。

あんたは近くで見届ける義務がある、違うか?」

「……おっしゃるどおりです」

そして、係りの者がクサナギを呼びに来る。

遂に決着の時が来た。

先程とはうつて変わって重い足取りのクサナギ。

そんなクサナギを心配そうに見つめるアイリーン達。

「クサナギ！」

「ん？」

「あんな奴やつつけちやつて！」

ビッヒ拳をクサナギに向けるアイリーン。

そんな仕草におもわずクサナギから笑いが漏れる。

「ああ。ほんじゃま、幽霊退治と行きますか」

そして、初めの試合と同じように手を振つてその場を後にする。入り口を通り、リングへと足を運ぶクサナギ。

観客の熱気は決勝もあつてか、一段と熱気が上がる。リングの上で相手を待つクサナギ。

入り口の隅で覗くカミコとアイリーン達。

そして、反対側の入り口から対戦相手が姿を現す……が。

「おいおい……本気かよ?」<sup>マジ</sup>

その光景にクサナギは啞然。

入り口から出てきたのは、なんとあの仮面をつけたカミコの友人だつた。

手には、本来クサナギと戦う予定だった対戦者の無残な姿があつた。

「まさか、いきなりメインディッシュとはな」

幽霊の予想外の行動に予定が狂う。

しかし、これはクサナギにとつては嬉しい誤算だつた。なにしろ覚悟していた無駄な一戦を省けたのだからだ。

幽霊は掴んでいた対戦者を手から離す。

そして、軽やかにリングに舞い降りた。クサナギを葬る為に。対峙する二人のバケモノ。

「おい、聞こえてるんだろ! カミコの友人さんよ!」

クサナギは幽霊に問いかける。

しかし、何の反応も示さない幽霊。

「こんな馬鹿げた試合を何時まで続ける気だ！　お前の本当に戦いたい相手はもういないんだよ」

そう、彼が本当に戦いたい相手は既にいない。  
それでも彼が戦う意味が分からなかつた。

幽靈はクサナギの言葉を意に介するようすもなく、戦つ構えをとる。

「『フュイ！　俺だ！　カミュだ！』

それを見かねたカミュが大声で叫ぶ。

「残念だけど俺はお前との約束を守れなかつた。もうこれ以上戦うのはやめてくれ！　俺はここにいるんだから…」

しかし、カミュの声すらも聞こえていない様子。

まるで”存在すら知らないかのように”

「どうやら、向こうは何が何でもやりたいらしいな」

避けれるものなら避けたかった。

これから始まるものは試合などという甘いものではない、殺し合いだ。

クサナギも構えをとる。

すこしづつ二人の間の空気が張り詰めていく。

息を整え、相手の出方を見る。

二人のただならぬ気配に観衆も思わず息を呑む。

そして、時が動き出す。

「ハアアアアアアア！」

掛け声と共に勢い良く幽霊の方へクサナギが駆ける。

そして、その勢いを殺さずに閃光のような右の拳を顔面めがけて放つ。

しかし、以前観客席で見たときと同じように最小限の動きで幽霊はそれをかわす。

構わずクサナギはボディ、顔面と上下に打ち分けてコンビネーションを放つ。

どちらも回避困難な攻撃。

だが、幽霊の名にふさわしい滑らかな動きでこれをかわす……が、クサナギはそんな事は分かつていた。

その為ボディ、顔面と避けられた際に相手の腕を掴む。

互いに背中合わせの状態になり、そのまま相手を投げようとするのだが。

「なっ！？」

できない。

相手の片腕を両手で持ち、そのまま背負い投げることが出来ない。それどころか逆に投げるはずのクサナギの体が浮いている。

そしてそのままあろう事か腕一本で逆に投げられる。投げられていく途中で咄嗟に掴んでいる両手を離す。

だが、離したのはまずかった。

クサナギの体は腕一本で投げられたとは思えぬ程勢い良く真横に飛んでいく。

このままでは観客席に衝突する。

必死に空中で体を捻ることで何とかリング内に着地する事が出来た。そして、顔を幽霊の方に向けると。

眼前にそびえる幽靈の姿があった。

そして、幽靈の手に力がこもるのが分かる。  
以前顔面を貫いたあの凶器だ。

ゆっくりと、今度はクサナギの顔面めがけてあの凶器が炸裂しよう  
とする。

放たれれば最後。

人に為す術は無い。

だが忘れてはならない、彼もまた人の姿をしたバケモノ。

彼の眼は『レギス』『エウス』『クルス（全てを司る眼）』相手の行動  
を予測することができる目。

だが、それはあくまで数ある中の一つの能力。  
予測ができるのならば、それを回避する方法も分かるのだ！

終りを告げる凶器が放たれる。

しかし、突然幽靈の体が崩れ落ちる。

クサナギは幽靈の凶器よりも早く、相手の足を刈る事でそれを阻止  
したのだ。

態勢が崩れて放たれた凶器は本来の威力が出るはずも無い。  
そして、そんな状態で放てばおのずと隙だらけになる。

膝が崩れた幽靈に対して、クサナギは遠慮なしで顔面に回し蹴りを  
放つ。

無論、殺す勢いだ。

派手な金属音と共に幽靈の首がくの字に曲がり、5m程横に飛び、  
勢い良く転がり  
倒れこんだ。

その光景に観客は熱狂。

ついにあの幽靈を倒す強者が現れると、称える様に。皆が喜ぶ中、一人心配そうに幽靈を見つめるカミコ。そして、駆け寄ろうとしたその時だった。

「……参ったな、あれでも結構本気だつたんだぞ？」

ボソリと苦笑いをしながら咳くクサナギ。

幽靈は何事も無かつたかの様にムクリと立ち上がる。それを見て構えをとるクサナギだが。

幽靈の顔を見ると、仮面にヒビが入っていた。

そして、それは自然と大きくなり、遂には割れてしまった。その時、クサナギ達は全てを知った。

「なつ！？」

その姿を見てある者は目を瞑り<sup>つむ</sup>、またある者は吐き氣を促す。彼の眼は瞳孔が開きっぱなしで、焦点がまるで合っていない。彼は眼が見えていなかつた。

しかし、それはあの仮面の時点である程度分かつていた。

覗き穴と思わしきものが見当たらない為、眼はあまり意味をなしていない。

つまり必要ないと考えられたからだ。だが……。

「やうじゅ」とかよ……俺達の声を聞こえない振りをしていたわけじゃなくて、

まさか本当に”聞こえなかつた”とはな

彼の本来耳がある部分。

そこには怪しげなヘッドフォンらしき機械がついていた。

そしてそこから管のような物が背中に続いており背骨の辺りに挿入されていた。

あまりに異常な光景。

「フュイー、どうして、なんでそこまでして…」

「カミュ、無駄だ」

「クサナギさん!?」

「見れば分かるだろ、あいつは眼はおろか耳も機能していない。あいつが何故

お前と戦わなかつたか、なぜ決勝戦の相手しか戦わなかつたのかわかっただろ」

「しかし… フュイーは一体どうやって戦っているんですか…?」

そう、彼は眼も耳も無い。

あれではここに来る事も、決勝戦と分かる事も無理であろう。

「これはあくまで俺の予想だが、あいつは「触覚」で察知しているんじゃないかな?」

「触覚?」

「ああ。動物とかでも居るだろ? 眼も耳も無いのに位置を探ることができるのが

まあ、それは「触角」だがな」

「そんな事可能なんでしょうか?」

「さあな。だが、あれだけの状態を見ると、よほどあなたと戦いたかったのだろうな

死して尚約束を果たそうとする……か

そう、彼は死んでいる。

意思が無く、相手が誰であろうと戦い続け、果たせぬ約束を果たす

為に。

そして、彼自身も約束が果たせたかどうかも分からない。  
ただむさぼり続ける殺人機械キラーマシン

そんな彼を見たクサナギはある決断をカミュに打ち明ける。

「カミュ、俺はあいつを殺すぞ」

「！？ なっ！ は、話が違います！ 彼を救つてくれと私は……」「救うさ。終りの無い約束からあいつを」

「やめてください！ あれは、あれはかけがえの無い……友人なんです」

涙ながらに擦れた声で語るカミュ。

自分でもどうすればいいかわからない。

相手はもう顔がわからない、言葉も聞こえない。

そんな彼を救う方法があるのか？

「覚悟を決めるカミュ。もし本当にあいつを救う気があるのなら、今ここで

呪縛から解き放つべきだ」

クサナギはゴーストに近づいていく。

そして、ゴーストもまた、クサナギに近づいていく。

両者リング中央の所でお互いにたちつくす。

「なあ、ゴースト、アンタにひとつこの約束はそこまでするほどものだったのか？」

「……」

ゴーストはクサナギの質問に答える事はない。

ただただ、焦点のあつていらない目がクサナギを見つめる。

そして、クサナギはため息を一度つくと。

「アンタみたいな奴は嫌いじゃないぜ。……だけどな、そろそろいいだろ？」

もうゆっくり休めよ」

そういう構えをとるクサナギ。

再び対峙する一人。

皆、この戦いに息を呑んで見守る。

そう、もはや賭けやショーなどではなく、純粋にこの戦いを見届けたいとここに居る観客全員がそう思っていた。

そして、二人の拳が再度交わった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0215d/>

---

クサナギ

2010年10月13日17時19分発行